祖国解放80周年
1945-2025

抗日戦の日々に



朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

抗日戦の日々に

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

目　次

まえがき

朝鮮人民が日本帝国主義の軍事的占領から解放されてすでに80年の歳月が流れた。

朝鮮の解放は、朝鮮人民の運命を劇的に転換させ、この時から朝鮮人民は、自分の運命を自らの力で切り開く新しい歴史を創造するようになった。

朝鮮の革命家たちは、偉大な祖国解放を達成するために満州の広野であらゆる困難を乗り越えながら日本帝国主義者と戦った。国家的後方や正規軍の支援もなしに、爪先まで武装した日本帝国主義者と対決したのは、悲しみや犠牲、厳しい飢えや酷寒、幾多の紆余曲折や難関を克服しなければならない前人未踏の道だった。

偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席は、父から譲り受けた2挺の拳銃を元手にして、日本帝国主義に反対する全ての愛国勢力の総決起で祖国を解放するという武装闘争路線を打ち出し、チュチェ型の最初の革命武力である反日人民遊撃隊を創建した。

祖国解放の日は必ず来るという揺るぎない信念と意志を抱き、抗日の血戦万里を踏み分けた主席の血のにじむ足跡

は、白頭山の山なみに、鴨緑江の流れに秘められている。

人民を信じ、人民に依拠し、天才的な英知と卓抜した戦略・戦術をもって抗日大戦を勝利へ導いた金日成主席の不滅の業績により、朝鮮人民はついに祖国解放の歴史的な日を迎えるようになった。

本書は、人々に深奥な真理と貴重な経験、歴史の教訓を与えるわれわれの抗日革命史の数々のエピソードの中で、その一部を紹介する。

1.建軍の草創期に

土器店谷の台地に上がった歓声

「わあー！」

人々の群が波打ち、歓呼でどよめいた。

1932年4月25日、土器店谷の台地では反日人民遊撃隊の創建式が挙行された。

この創建式を見物しようと土器店谷の台地に大勢の人々が集まってきた。

「おや、金隊長があんなに若かったのかね。まだ20代の初めに見えるんだけど……」

その頃、安図境外の人々の間では、金隊長は、背丈が六尺でひげが真っ白く、鎧かぶとに身を固め白馬に乗っているといううわさが立っていた。ところが、実際には遊撃隊員とまったく同じ軍服を着た青年将軍だった。

当時、遊撃隊員はクヌギの樹皮で緑色に染めた軍服を着、左の胸に5角の赤い布切れを付け、そこに中隊の番号を記し、軍帽には赤い星を、すねには白い脚絆を巻いた。チョウセンカラマツで囲まれた台地の空地に、このような服装を整えた遊撃隊員たちが区分隊別に整列していた。

隊伍を見回していた主席が演説を始めた。

「みなさん！

今日われわれは、反日武装闘争を繰り広げて強盗日本帝国主義者を打倒し、祖国解放の歴史的偉業を成し遂げるために、反日人民遊撃隊を組織することになりました」

主席は、今日のわが国は日本帝国主義者の軍靴のもとで完全な植民地と化し、5000年の悠久な歴史と燦然たる文化を持つ朝鮮民族は、日本帝国主義者の植民地奴隷となり、苛酷な搾取と抑圧を受けている、こぞって日本帝国主義者に反対する武装闘争を展開しようと呼びかけた。

全ての隊員は声を限りに万歳を叫び、人民は熱烈な拍手を送った。

全世界の勤労者の国際的な祝日であるメーデーに、反日人民遊撃隊の閲兵行進が行われた。

反日人民遊撃隊は赤旗を先頭にかかげて、群衆の熱烈な歓迎を受けながら安図市街を歩武堂々と行進した。

あっさりした軍服に赤い5角の星をつけた帽子をかぶり、ピカピカ光る銃を担いだ20代の頼もしい隊員たち……

地軸を揺るがしながら勇ましく行進する遊撃隊員の足音は、人民に大きな信念を与えた。

小営子嶺に響いた銃声

反日人民遊撃隊を創建した金日成主席は、遊撃隊伍を実戦の中で鍛練させることを決心した。

遊撃隊が南満州遠征を準備していたある日、主席は参謀長車光秀に、われわれが銃を取って立ち上がったのだから、一度戦ってみてはどうだろうかと聞いた。

「戦闘をやろうということだね？」

「そうだ。部隊をつくったからには、戦いを始めるべきではないか。……発つ時は発つとして、安図でひとつ銃声を上げてみよう。戦いもしないで隊員が鍛えられるわけはない」

そうして5月下旬、小営子嶺戦闘が行われるようになった。

小営子嶺は安図と明月溝のほぼ中程にあり、谷に沿って道がくねくね続いているので伏兵には格好の地形だった。

ちょうどその時、武器と補給物資を積んだ満州国軍の馬車輸送隊が、明月溝から安図に向けて出発したという地方組織の通報を受けた主席は、隊員たちを引き連れ、迅速な夜間行軍で小営子嶺に到着し、道の両側に伏兵を配置した。

主席は、初の戦闘に参加した隊員たちの興奮した気持ちをおもんぱかって、隠蔽地を回りながら信念を与えた。

輸送隊は夜がかなり更けてから現れたが、12両の馬車と満州国軍の護送兵で編成されていた。

前方の伏兵は馬車隊をそのまま通過させた。行列が2番目の伏兵の前へ半分ほど入ってきた時、主席は岩の上に上がって、一発の銃声で射撃命令を下した。

谷間に割れんばかりの銃声が鳴り響き、喊声が上がった。

奇襲された輸送隊は敵味方を見分けず、盲滅法に銃を撃ったが、多くの死傷者を出して投降した。

伏兵戦は完全な成功であった。

反日人民遊撃隊が小営子嶺で日本人指揮官の引率する満州国軍の輸送隊を撃滅したといううわさは、安図県の向こうの敦化や延吉地方にまで広がり、人々は集まりさえすれば、その戦功談でもちきりだった。

母親の最後の姿

反日人民遊撃隊が小営子嶺で最初の銃声を上げた後のある日、弟の金哲柱が金日成主席を訪ねて小沙河へやってきた。

何かの事情があって来たのを直感した主席は「土器店谷でなにかあったんじゃないか？」と聞いた。

「ううん、なにも変わったことはないよ」

つくり笑いをする弟に、主席は再び聞いた。

弟は溜息をつきながら、お母さんの病気がもっと重くなったみたいだ、2日前からもう箸に手をつけようとしない、と言った。

主席はかたずを飲んだ。

翌日、主席は一斗の粟を携えて母親を訪ねて行った。

その晩、夜更けまで母親と遊撃隊の南満州遠征の話を交わした主席は、翌朝、弟と共に柴を刈ってきた。

その日の夜、母親は主席を座らせた。

「まさかおまえが、米袋まで担いできて、母さんを養おうとするとは思わなかったよ。母さんの病気が心配なのかい。親孝行をしようという気持ちはありがたいけれど、私

はそんなことで心が晴れはしない。……おまえにはもっと大事なことがある。それはお父さんの遺言を守ることなんだよ。私よりもっと苦しい思いをしている朝鮮人はいくらでもいる」

そしてこう言った。

「おまえが家を出て革命活動を立派にすれば、私の病気だって治るかも知れないよ。だから、おまえは部隊を引き連れて早く発ちなさい。それが私の願いだよ」

翌朝、母親は5元紙幣を4枚差し出した。

「客地ではなにかとお金が要るんだろうから、これを持って行きなさい。男のふところには急場に使うお金がなくてはならないものだよ」

意外な金を手にした主席はしばらくの間ためらった。

指がすり減るほど洗濯や裁縫の賃仕事をしながら、1銭、2銭と蓄えた金。その金なら若い牛が買え、米を買っても数人家族が1年は食べていけるほどの金であった。

主席は母親の思いやりに涙ぐみながら歩みを移した。

ところが、家を発つことを思うと、病床の母親と弟たちが気がかりになって、しばらくの間、家の周りを回っていた。

この時、とびらが開き、母親の厳しい言葉が再び響いた。

「何が気になってまだ行かず、ぐずぐずしているの。国を取り戻そうと決心した人間が、そんな弱気になって家のことでくよくよするようでは、どうして大事を成し遂げられるというの。おまえは家のことを心配する前に、獄中にいる亨権叔父や晋錫伯父のことを考えるべきではないか。奪われた祖国を思い、民衆を思うのだよ。日本人に国を奪われて22年にもなるのに、おまえが朝鮮の男児なら大きな心をもって、しっかりと第一歩を踏み出すべきではないか。この先、おまえが母さんのことを気にしてここへ来るというなら、二度と門前に現れてはいけないよ。私はそんな息子には会わないから」

「お母さん、お元気で」

主席は母親に丁重にあいさつをして、決然と村の外へ向かって大股で歩き出した。

丸木橋を渡ってふりかえると、白衣の母親が門柱に体を支えて主席を見守っていた。それは、母親の最後の姿だった。

それ以来主席は、南満州遠征の道ではもちろん、革命が試練に際会すると、母親のその日の頼みを噛み締めながら革命闘争の道を歩み続けた。

合作は不可能か？

金日成主席の率いる南満州遠征隊は、安図を発ってからほぼ1カ月近く苦難に満ちた遠路を経て通化に無事たどり着いた。

通化は、撫松から西南方に200余キロ離れた通化県の所在地で、1930年代の南満州一帯の朝鮮独立運動家の活動中心地の一つだった。

通化の地が南満州遠征隊の歓迎熱気で沸き立っていた1932年の夏のある日、独立軍の司令梁世鳳は主席の軍隊を見たいといって反日人民遊撃隊の宿所を訪ねてきた。

遊撃隊員は彼を歓迎し、梁司令も大変気分がよかった。

ところが、隊員たちの前で彼が敵対的な演説をしたので、せっかくの歓迎の雰囲気はたちまち変わってしまった。

彼は、朝鮮の独立を成就するためにはなによりも利敵行為をやめなければならない、ところが共産党はいま利敵行為をしている、農村では地主と農民を反目させ、家庭では男女平等だのなんのといって夫婦の仲を割っている、口を開けば収奪だ、打倒だといって同胞の間に不和の種をまき、異民族の間に不信の壁をつくっていると言った。

遊撃隊員は彼の演説を聞いて憤慨し、梁司令もやっぱり腹を立てながら自説を曲げようとはしなかった。

「司令、われわれはそんな利敵行為をする者たちではありません。われわれは朝鮮民族の解放を目指して戦い、勤労民衆の利益を守って戦う者です」

主席は、共産主義者を敵視する梁司令の思想が一朝にして改変されるであろうとは考えなかった。

合作の緊要な課題を果たせず、独立軍との衝突を避けて通化を去った反日人民遊撃隊員の間には沈うつな気分がただよっていた。

しかし、主席は通化を去りながらも、独立軍との合作が

南満州遠征

金日成主席の率いる反日人民遊撃隊主力部隊の南満州への進出。1932年6月から8月まで行われた。

南満州遠征の当面の目的は、鴨緑江沿岸で活動する梁世鳳の独立軍部隊と共同戦線を張ると共に、南満州の武装部隊とも連係を結び、広範な人民の中に革命の種をまき、この一帯に武装闘争の大衆的基盤を築き上げるところにあった。また、反日部隊との連合戦線を形成し、創建されてまもない反日人民遊撃隊を質的・量的に急速に拡大・強化するところにあった。

不可能だという結論を急いで下そうとはしなかった。
むしろ、梁司令がいつかは必ずわれわれを理解し、われわれと手を握る日が来るだろうと期待した。
それ以来のことはどうなったのだろうか。
独立軍が最後の瀬戸際に立つと梁司令は部下たちに「わしは死んで抗日をできないが、おまえたちは生きて金日成司令のもとへ行くのだ。生きる道はそれしかない！」という遺言を残した。
この遺言によって4年後、通化市街で反日人民遊撃隊を歓迎していた300余名の独立軍隊員たちが白頭山へ訪ねてきて朝鮮人民革命軍に合流するようになった。

中国老人の感服

1932年8月のある日、部隊と共に安図県下小沙河を通り過ぎていた金日成主席は、山奥にある一軒家で一晩泊まることにした。
その家の主人は呂修文という中国の老人だが、非常に情熱的な人間だった。
主席にいろいろと質問していた老人は、だしぬけに、朝鮮の烈士の中で自分が一番尊敬する偉人は安重根だと言った。

「ご老人は朝鮮人でもないのに、どうして安重根のことをそんなによくご存じなのですか？」
「満州に住む者なら誰でも安重根を知っていますぞ。ハルビン駅に安烈士の銅像を立てようという人たちさえおるんじゃからね。わしはいまでも、息子たちによくこう言い聞かせているんじゃ。革命家になるなら孫文先生のような革命家になり、立派な男になりたかったら安重根のような男になれ、とね。金隊長さん、どうせ部隊をつくったからには、関東軍司令官のような大物をやっつけることができないもんかのう」
主席は老人の素朴な言葉に思わずほほえんだ。
「たかが関東軍司令官を一人殺したところでなにになります。伊藤博文を殺したら別の伊藤博文が出てきたように、本庄を殺したってまた別の本庄が出てくるではありませんか。テロなどで大事がなせるものではありません」
「では、隊長さんはどんな方法で戦うつもりですかい？」
「関東軍が十万だそうですから、その十万を相手に戦うつもりです」
「金隊長！　まったく見上げたもんじゃ。隊長さんこそ安重根のようなお方ですわい」
主席は笑いながら語を継いだ。
「過分なお言葉です。私は安重根のような立派な人間

ではありませんが、亡国の民の生活には甘んじないつもりです」

主席の剛腹さに呂修文老人は感服した。

最後まで抗日を続けよう！

1933年1月初のある日。

金日成主席は、老黒山一帯に派遣されて活動していたある工作員から思いがけない知らせを受けた。

その内容は、日本軍が羅子溝一帯に駐屯していた王徳林部隊に対する全面的な「討伐」を強行すると、数千数万の大兵力が一陣の風に吹きまくられる枯葉のように、日本軍の弾幕を避けソ満国境へ向けて退却していること、少なからぬ反日部隊がすでに東寧一帯に入った上に、一部の反日部隊は敵に投降したり土匪に転落しているということだった。

主席はすぐ老黒山一帯へ進出することを決心した。

当時、そこにはおびただしい「討伐」兵力が集中しているので、老黒山一帯への進出は危険を伴うことだった。

隊伍は零下40度を上下する酷寒の中で腰まで埋まる雪道を踏み分けながら行軍した。

道路には敵がひしめき、随時敵の飛行機が投降を促すビラを撒き散らしながら奔走していた。隊伍は数日経って老黒山が望めるある樹林地帯に到着した。

近くに駐屯しているある反日部隊を訪れた主席は、その部隊の頭領に会い、奪われた国を取り戻すために反日救国抗戦に勇躍馳せ参じて立派に戦っていることを激励した。そして、今、日本帝国主義者は満州全域や中国本土にまで侵略の魔手を伸ばしながら至るところで中国人民に野獣的な虐殺蛮行を働き、中国人民の優れた文化遺物と文化財を破壊し、略奪していると言った。

主席は話を続けた。

……日本帝国主義者の侵略の魔手が伸びている至るところで人民の闘争が激しく展開されている。難関と試練を乗り越え、全人民が立ち上がって戦う時、いかなる侵略者も打ち砕くことができるということを歴史の教訓は示している。日本帝国主義者に反対する共同の戦線で力強く戦っていこう。……

その後、彼は他の反日部隊の頭領たちがソ連を経由して中国本土へ逃走した時にも、主席との信義を守って反日抗戦を続けた。

袋のネズミ

老黒山一帯で反日部隊との活動を終えた金日成主席は、1933年2月中旬、腰営口へ戻ってきた。

腰営口の人たちは、遊撃隊員にキビ餅やソバをつくってもてなした。夕方には児童団員の公演についで、遊撃隊員と人民が一つに溶け合って交歓会も行った。

ところが交歓会の最中、主席は翌日、日本軍守備隊が遊撃区を「討伐」するという通報を受けた。

主席は、交歓会を終えて宿所に戻るまで、隊員たちに敵区からの通報の内容を公開しなかった。

腰営口は、海抜500～800メートルの険しい山々で囲まれている天然要塞であり、斜面が急で、山には石が多かった。その上敵がたむろしている大興溝は、腰営口から西南方16キロ余り離れているため、遊撃区を攻撃するには、必ず道路が狭く、谷のある険しい山岳地帯を通過しなければならなかった。

主席はまさにここで、それも敵が遊撃区に到着する前に、途中で掃滅することを決心した。

主席は隊伍を引率して腰営口の関門である大北溝の西山

に進出した。

主席の指揮の下に夜陰にまぎれて待ち伏せ地点についた遊撃隊員は、凍土を掘って陣地を作り、周辺の石を集めて石の山を積み上げげた。

夜が明けると、敵の討伐隊を乗せた数台のトラックが谷間の狭い道路に沿って待ち伏せ区域の中に入った。

敵は袋のネズミとなった。

数十名の死傷者を出した敵は、次の日も兵力を総動員して腰営口に攻め入ってきたが、前日同様おびただしい死者を出して逃走した。

この戦闘は、反日人民遊撃隊が間島地方の遊撃区域に来て行った初の戦闘だった。

いささかの隔りも置かずに

1933年2月、反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて小汪清馬村に来た主席は、この村に革命の司令部を定めた。

汪清遊撃区の人民と遊撃隊員たちは、青年将軍である主席を迎えた喜びに溢れていた。

ところが、主席の姿を目のあたりにした瞬間、遊撃区の人民は主席が着ている軍服があまりにも質素で平凡なことに気が付いた。

裁縫隊員たちは一番良い生地を選んで主席の軍服を別途に仕立て始めたが、そのことを主席が知るようになった。

ある日、裁縫隊に足を運んだ主席は、なぜ私には聞かずにそんなことをしたのだ、私がなんの名目で上等な生地で作った軍服を着ることができるだろうか、私はそんな待遇を受けるのを一番嫌がる、そんな軍服を仕立ててはいけない、遊撃隊では職務は異なっても、規律は一つであると痛烈に批判した。

指揮官が人民の誠意だから今回だけは許可してほしいと懇願したが、主席は受け入れなかった。

仕方なく裁縫隊員は、隊員と同じ綿布で主席の軍服を仕

立てた。

ついに部隊全体が新しい軍服に着替える日が来た。

主席は新しい軍服を見て、上手に仕立てた、このように隊員たちと同じものを着ると、見た目にもよく、心も安まる、このように隊員たちと同じく着るのがよい、この軍服を人民が与える革命の軍服と考えて着ると言った。

このように主席は、長きにわたる抗日革命の日々に隊員たちといささかの隔りも置かずに生活した。

払った斧代

1933年3月上旬、豆満江の岸辺の涼水泉子という村であったことである。

金日成主席は、当時、ある中国老人の家に泊まっていたが、早朝には老人夫婦が目を覚ます前に起きて家の内外をきれいに掃除し、豆満江へ出て氷を割り、水を汲んでかめに満たしたりした。

そんなある日、いつものように、主席は斧を持って川に出て氷を割っていた。その日はたいへん寒くて、氷の穴も厚く凍りついていた。

ところが、氷の穴が九分どおり出来上がった矢先に、斧

が柄から抜けて氷の穴に落ち込んでしまった。

主席は長い竿で川床をさらってみたが、斧はとうとう見つけ出せなかった。

主席は仕方なく老人夫婦に十分な償いをし、重ねてわびた。

老人はかたくなに遠慮したが、主席はとうとう老人に斧代を払った。

でも主席は氷穴に落ち込んだ斧のことを片時も忘れていなかった。

その時から長い歳月が経った1959年5月のある日、主席は抗日武装闘争戦跡地踏査団が中国の東北地方へ行く時、涼水泉子のその老人に会ったら、私に代わって謝ってほしいと頼んだ。

2. 遊撃根拠地に依拠して

初の人民革命政府

南満州と北満州への遠征を終えて汪清に帰った金日成主席は、ソビエトの施策に対する不満の声が遊撃区の至るところから沸き起こっている現実を目撃した。

極左分子らは日本帝国主義に反対する人々を結集するのではなく、かえって彼らを敵の側に押しやっていた。

彼らは、地主の土地は言うまでもなく、富農や中農の土地や財産まで没収することによって、少なからぬ大衆が革命に幻滅を覚えて遊撃根拠地を離れるようにし、はては日本軍に虐殺された父母兄弟と妻子の血塗られた恨みを晴らそうと根拠地にやってきた革命大衆まで冷遇して、彼らを革命隊伍から脱落させる妄動をあえて働いた。

主席は、反帝反封建民主主義革命の課題を遂行すべき東満州地方の遊撃区ではソビエトが実情に合わないものであり、思い切って政権形態を変え、人民に喜ばれる政策を実施しなければならないと決心した。

主席は、人民革命政府第5区委員会の代表を選出する集会に参加して20名ほどの嘎呀河地方の農民と語り合った。

「われわれはソビエト政府のかわりに新しい政府をう

ち立てることにしました。しかし、この政府はみなさんの意思にかなったものでなければなりません。どんな政府にするのがよいでしょうか」

「みんなが気苦労をせずに暮らしていけるようにしてくれる政府さえ立ててくれれば、言うことはありません」

主席は、ソビエト政府に代わる政府として人民革命政府をうち立てるということ、そしてこの政府は真の人民の政府になるはずであるということを宣言した。

「この政府は、祖国を愛し同胞を愛する全ての人の利益を代弁し擁護し、その宿望を実現させるでしょう。みなさんの宿望はなんでしょうか？　土地を持つこと、労働の権利を持つこと、子どもを教育すること、万民が平等に暮らすこと……　人民革命政府はそういう願いを全てかなえるでしょう」

嘎呀河の人民は人民革命政府路線についての主席の説明を聞いて、それをひとしく支持した。

主席は人民革命政府の誕生を宣言する儀式に先立ち、ソビエト政府が没収した個人の財産をいっさい元の持ち主に返還するようにした。

主席はこの日の集会で、人民革命政府は真の人民の政権であるという内容の演説を行った。

人民革命政府は、遊撃区の各集落に児童団学校を立てて

無料教育を実施し、全ての住民が梨樹溝と十里坪に設置された遊撃区病院で無料治療を受けるようにした。

極左的なソビエト施策の被害をこうむるまいと敵区へ行った人も、一人二人と遊撃区に戻ってくるようになった。遊撃区は再び信頼し親しみ合い、朗らかに笑いさざめく睦まじい大家庭になった。

コミンテルンの派遣員

1933年の4月のある日、大布衫姿の中年の男が金日成主席を訪ねてきた。

身なりや物腰がかなり上品で洗練されている感じのその男は、主席を見ると遠くから笑顔をつくり、挨拶代わりに片手を高く上げてみせた。

旧知の客ではなかろうかと勘違いさせられるほどのその男は、コミンテルンの派遣員潘省委だった。

主席は彼と共に10日余りの間大いに語り合った。その過程で主席と潘省委は親しい仲になった。

経歴や家族のことから始まった話は政治問題に移った。

主席は潘省委に、コミンテルンの決定実行のための朝鮮の共産主義者の努力を説明したのち、コミンテルンの路線

と指示に対する立場と態度を明らかにし、われわれはコミンテルンの処置に対し若干の意見もあると言った。

主席は、われわれはコミンテルンがかつて朝鮮共産党の解体を宣言したことをたいへん残念に思っている、分派は朝鮮の共産主義者だけにあるわけでもないし、ジャガイモの偽印をつくったような事件はインドシナ共産党や他の党でもあったではないかと尋ねた。

困った顔をしていた潘省委は、朝鮮共産党は解散させられたのに、インドシナ共産党は解散させられず健在である理由はホー・チミンのような優れた人物がインドシナ代表としてコミンテルンに構えていたからである、あの当時、朝鮮共産主義運動の隊伍には、コミンテルンに認められるだけのずばぬけた人物がいなかったし、指導中核がなかったからだとした。

コミンテルンに認められるだけの世界的な指導者の欠乏、そのため朝鮮共産党の解散を阻止させられなかったという彼の主張は十分納得がいくものであった。

主席は彼に、われわれは必ず自分の共産党を創建しなければならない、朝鮮人が自分の党を再建しようと努力しないのは、朝鮮革命の放棄にひとしいことである、われわれは間借り部屋で肩身の狭い思いをしながら、その日暮らしをするような人間になってはならないはずであるとし、この

ようにつけ加えた。

「こういう立場から、われわれはすでに3年前に基層党組織を先に結成し、それを拡大・強化する積み上げ式の方法で党を創立するという新しい方針を打ち出し、建設同志社という名称の党組織を結成しました」

潘省委は驚いた。

(建設同志社？……)

主席は彼に、卡倫で初の党組織を結成することになった歴史的経緯と、その結成・拡大の過程でじかに体験したさまざまな事柄を詳しく説明した。

潘省委は主席の言葉を注意深く聞いた。

彼は主席と別れる日、このように言った。

「金日成同志の印象は一生私の記憶に残りそうです。汪清に来て金日成同志と知り合いになれて本当にうれしいです」

「私もやはり同じ気持ちです。潘同志に会えたのは私の幸運です。正直にいって別れたくありません」

潘省委は主席の手を強く握って頼んだ。

「別れたくないのは私も同じです。今度の旅程が終わったら、私も女房ともども東満州へ来て、金日成同志と共に手をとり合って活動してみたいんです。……朝鮮のホー・チミンになってください」

潘省委はこんな言葉を残して汪清を後にした。

密林の兵器廠

金日成主席は馬村にいた頃、兵器廠の運営にとくに関心を払い、それに力を入れた。

主席は遊撃隊員に鉄床、金槌、ハンマー、やっとこ、やすりなどを集めさせ、それを元手に馬村の谷間に小さな鉄工所を設けるようにした。

その鉄工所が後日、「馬村兵器廠」「小汪清兵器廠」と呼ばれた密林の兵器廠である。

当時、鉄工所の人々は鍛冶の経験がほとんどなく、まして兵器の修理などは一度もしたことのないずぶの素人だった。

しかし、兵器廠の人々は、自力更生のみが生きる道であり、革命を推し進める上で肝心なのは自らの力を最大限引き出すことであるという心構えで兵器製作に取り組んだ。

その後、遊撃区密林の兵器廠では爆弾が製造され、拳銃や小銃の修理はいうまでもなく、爆弾の製作に必要な火薬まで難なく作り出した。

火薬の製造には、たえず危険がつきまとい、時には命を落とすことさえある。最も危険なのは、爆弾や銃弾に火薬を詰める作業である。それでも彼らは作業場から離れようと

しなかった。

火薬の開発は、兵器の製作に大きな転換をもたらした。火薬が作れるようになると、爆弾の製造量は急速に伸びた。爆弾にはブリキ缶が利用され、それに導火線がつけられた。外皮は普通、空き缶を使った。敵の統治区域や半遊撃区の地下組織を通して集めた空き缶に火薬を詰め込んだ油缶のような別の缶を入れ、外皮と油缶の間に、犂やその他のものを砕いた鉄片を入れ、芯をつければ爆弾が出来上がるのである。

兵器廠で最初に作られた爆弾を音爆弾と呼んだ。音爆弾はやがて唐辛子爆弾となり、ついに「延吉爆弾」と呼ばれる強力な爆弾として完成した。この爆弾は手榴弾とは比べようもなく大きい殺傷力をもっていた。敵は、パルチザンの爆弾といえば、震え上がったものである。

火薬が作られるようになってから、遊撃根拠地では木製の砲も製作された。革命軍が木砲を撃つと敵は何事かと驚き、呆然自失の体であった。

当時、遊撃区の兵器廠には、近代的な機械や工具はほとんどなかった。

兵器廠ではやすりをかけ、砥石でみがき、金槌でたたき、火と水、泥土で焼きを入れたりして、小銃の駐退桿や撃針を修理した。やがて機関銃なども簡単に再製した。

1930年代前半期に遊撃根拠地で積んだ兵器分野の経験

は、1930年代後半期、白頭山根拠地に建てられた兵器廠で活用され、さらに発展した。

司令官も人民の子

1933年4月初め、金日成主席の率いる遊撃隊の一部隊が、豆満江畔の涼水泉子付近のある農家の前でしばらく休息していた。

その隊伍には負傷者が一人いた。

遊撃隊員たちは彼を暖かい部屋に寝かしたくて外で家主を呼んだが、何の反応もなかった。

主席は自分の外套を脱いで負傷者にかけてやり、斧を手にして薪を割りはじめた。

隊員たちも庭の雪をかき、柴を刈ってきて火を焚きながら炊事の準備を急いだ。

一度も遊撃隊に会ったことのない家主の老夫婦は、彼らを日本軍に見違えて家の中に隠れていたが、その光景を見てあたふたと庭に出た。

主席は、老人を「お爺さん」と呼びながら煙草を勧め、暮らし向きも一々尋ねた。そして、この家は古い農家のようだが、どうして鶏の一羽も飼えず、寒い冬に子どもたちに

防寒帽さえも与えられないのかと聞いた。身の不運を嘆く老人に、朝中人民がご老人のように貧しい暮らしをするのはもって生まれた運命ではなく、日本帝国主義者と地主の非人間的な搾取と略奪のためだと分かりやすく説明し、われわれが幸せに暮らせる道は、日本帝国主義に反対して闘う以外にないと語った。

主席は老人の家を発つ時、暮らしの足しにといくらかの金を出した。

手前の方が金日成将軍であることを知った老人は、司令官が薪を割るとは、と驚くばかりだった。

主席は微笑を浮かべて言った。

——私も人民の子です。人民がすることを私にできないわけがありません。……

引き返して払ったジャガイモ代

1933年4月下旬、汪清遊撃区の食糧事情は困難をきわめていた。

食糧工作に出かけていた二人の遊撃隊員は、敵の警戒が厳しくて手ぶらで帰るようになった。考えあぐねた末、取り入れの終わったジャガイモ畑で凍ったジャガイモを拾っ

ていた彼らは、偶然ジャガイモむろを見つけた。

二人はジャガイモ畑の主を捜すのは不可能だと思い込んで、ジャガイモを背中いっぱい担いで遊撃区に帰ってきた。

そのことを知った主席は彼らを呼んだ。

主席は彼らに、遊撃隊にはいかなる状況や逆境の下でも必ず守らなければならない一つの規律がある、それがまさに革命的な対民衆規律である、われわれはたとえ飢え死にし、凍え死にすることがあっても絶対に人民の財産に手をつけてはならない、これは人民の息子・娘からなっており、人民の利益のために戦うわが遊撃隊の鉄則である、食糧事情が困難だからといって人民の財産に損害を与えるなら、われわれを指して人民のための軍隊、革命のための軍隊だと言えるだろうか、と切々と言った。そして、それゆえわれわれは反日人民遊撃隊を創建する時、瞬時も人民を忘れてはいけないという意味から遊撃隊の名称に「人民」という文字を入れ、「魚が水を離れては生きていけないように、遊撃隊は人民を離れては生きていけない」という革命的スローガンをかかげたのだと言った。

主席は、自分らの過ちを悔い改める彼らにジャガイモむろの主を捜して金を十分に支払い、詫びもするようにと指示した。

相当な時間をかけてジャガイモ畑の主に会った二人は、自分らの過ちを詫び、ジャガイモ代も満足に支払った。

全人民防衛戦の火種

1933年のある日。

金日成主席は小汪清遊撃区に対する敵の大「討伐」が予見されるという通報を受け、作戦案を練っていた。

その時、遊撃区の長老が真夜中に主席を訪ねてきた。遊撃区で戦っていた息子を失った老人だった。

老人は、この頃主席がずいぶんやつれたと言いながら、自分の家で夜食なりと一緒にしようといって手をとった。主席は老人の後に従った。

食事後、主席は老人と枕を並べたが、なぜか老人はすぐに寝つけず、しきりに溜息をついていた。

「ご老人、どうして溜息ばかりついているのです？」

主席は老人の方に寝返った。

「どうにも眠れんのじゃ。敵が遊撃区のすぐ外に何千人もの陣を敷いているというのに、のんびりと寝ていられるかの」

そして、今度の討伐では遊撃区がつぶれるといううわさもあるが、どう思っているのかと聞いた。

主席は、遊撃区がつぶれるというのは反動どもが流しているデマである、しかし、しっかり対策を立てないと、遊撃区

がつぶされてしまう、それで、私も眠れない、と言った。

「遊撃区がつぶされてはいかん。遊撃区がなければ、生きがいもなくなってしまう。そんなことになるなら、死んでカラスの餌食になるか、亡霊になってさまようほうがましだ」

「そうです。われわれは死んでも、この根拠地を守って死ぬべきです。でも、どうすればよいでしょうか？　敵は数千人にもなるのに、小汪清を守る遊撃隊はその100分の1そこそこなのですから……」

老人は煙草をスパスパ吸い込むと、真顔になって主席のほうに枕を近づけた。

「兵隊の数が少なければ、わしも隊長の部下になろう。この小汪清には、わしのように銃を撃てる年寄りが一人や二人じゃない」

そして老人は、「鉄砲さえくれればいくらでも戦うことができる。以前、わしが住んでいたところの近くに、たしか独立軍が埋めた鉄砲と弾があるはずだ。それを見つければ、猟師や独立軍にいた年寄りはもちろん、青年にも鉄砲を持たせることができる」と言った。

老人の話は、全人民の抗戦のみが当面の難局を打開する唯一の活路であることを示唆してくれた。

老人の言葉に主席は力づけられた。

（そうだ。人民が戦うといえば戦うだろうし、人民が勝

つといえば勝てるのだ。戦争の勝敗は人民の意志にかかっている。人民をいかに奮起させるかにかかっているのだ)

これがまさに、主席が新たに見出した全人民防衛戦の火種だった。

敵背攪乱作戦

1934年に入り、小汪清遊撃区防衛戦闘(馬村作戦)は苛烈をきわめた。

敵は満身創痍になってあえぎながらも執拗に長期戦を企図した。人員も兵器も食糧も補給されるあてのない遊撃根拠地を、長期戦の泥沼に引きずり込んで、凍えて死に、飢えて死ぬのを待とうとしたのである。

金日成主席は、遊撃区防衛戦と共に敵の背後で強力な攪乱作戦を展開することを決心した。

その時、県党の一部の人がこれに難癖をつけた。

「敵が攻め込んでくる時に、軍隊が遊撃区の外へ出ていくというのは話にならん。それは人民がどうなろうと軍隊だけが生き残ろうという考え方だ」

主席は彼らを説得した。

——敵が長期戦を企てる状況下で、われわれがいかに兵

力を集結したところで、敵と対等に戦えるはずはない。それで敵背攪乱作戦を展開しようということである。人民を四方に避難させ、遊撃隊はさらに兵力を分散させて敵の背後を攪乱しよう。かりに銃を持った10人の隊員が素手の青年3、40人をともなって守りの弱い敵陣を攻撃してまわるならば、状況は変わるだろう。……

人々は驚きながらも、それに応じることをためらっていた。

「敵中には誰が行く？　志願者は私のあとに続け。多くはいらない。半分は敵中に入り、半分は遊撃区に残って人民を保護しなければならない。敵中に行く者は、今夜のうちに包囲網を突破しよう」

主席は遊撃隊を二手に分けた。

一隊は遊撃区を守り、一隊は主席が率いて敵中に入った。

案に違わず敵の背後はほとんどがら空きだった。

最初に攻撃したのは涼水泉子だった。

遊撃隊の奇襲によって満州国軍と自衛団が壊滅され、日本領事館警察の兵営が占領された。

涼水泉子で敵背攪乱戦の最初の銃声をあげた遊撃隊は、遠くへ行方を隠したように見せかけた後、もとの地域へ引き返し、新南溝で機動中の敵のトラック輸送隊を襲撃して掃討し、大量の小麦粉と軍需物資を分捕った。

新南溝からかなり遠い北鳳梧洞の山岳地帯にひそかに抜

け出し、つぎの戦闘を準備した主席は、その後再び北鳳梧洞の満州国軍と警察、自衛団を奇襲するようにした。北鳳梧洞で勝ちどきをあげ、寺洞方面に進出した遊撃隊は、東谷の山林警察隊の兵営を襲い、敵兵を残らず殺傷した。

敵は四方で悲鳴を上げた。

主席の敵背攪乱作戦にあわてふためいた敵は、遊撃区に投入した兵力を撤収せざるを得なかった。

そうして数十日間にわたって行われた小汪清遊撃区防衛戦闘は勝利のうちに終わった。

改編された反日人民遊撃隊

小汪清遊撃区防衛戦闘が終わった後、金日成主席は遊撃隊の指揮体系を単一化する問題についていろいろと考えをめぐらした。

馬村作戦の総括会議で韓興権中隊長は、小汪清管内で防衛戦に参加した指揮官より熱弁を吐いた。

彼は馬村作戦で自分の中隊が受けた任務は、老爺嶺を越えて東満州に侵入する敵を牽制することだったが、その間、敵とは一度も交戦したことがなく、主力部隊のためになにもできなかったと言った。

つまり根拠地討伐軍の後頭部を叩くべきであったが、そうしなかったし、そうすることもできなかったというのである。

和竜県の場合も同様だった。

敵が漁郎村遊撃根拠地への「討伐」を始めたのは1933年11月の初めだった。小汪清遊撃区攻撃に15日ほど先立っていた。その時、他県の遊撃部隊が相互協力して敵の背後を攻撃していたならば、漁郎村遊撃区ははるかに有利に戦えたことだろう。

これはなにを意味するのか。

遊撃区別に敵の討伐時期が異なる実情で、各県と区の遊撃部隊を統一的に動かす単一の指揮体系と参謀機構があったならば、全ての遊撃隊が歩調を合わせ、戦闘をより積極的に容易に行うことができたであろうことを雄弁的に示唆していた。

しかし当時は、遊撃隊が各県の軍事部に所属されていたため、各県の遊撃部隊に対する指揮が統一的になされていなかった。

一言でいって、遊撃運動はその内容と規模に見合った新しい器を求めていた。

この要求を満たせる一番の近道は、反日人民遊撃隊を統合して大部隊の革命軍に改編することだった。

1934年3月のある日、主席は馬村で反日人民遊撃隊軍・政幹部会議を招集した。

主席は会議で『反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編

することについて』という歴史的な演説を行った。

主席は演説で、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編する必要性に言及し、朝鮮人民革命軍の組織体系と党組織体系を確立する問題に至るまで詳細に指摘した。

こうして、反日人民遊撃隊は朝鮮人民革命軍に改編された。

北満州に響いたハーモニカの音

1934年9月中旬、北満州で活動中の周保中をはじめ抗日武装部隊の指揮官たちが朝鮮人民革命軍に援助を求めてきた。

こうして10月下旬、金日成主席が率いる部隊の第1次北満州遠征が始まった。

第1次北満州遠征隊が北満州に足を踏み入れると、寧安の人々はうろたえた。

朝鮮人民革命軍について聞いたことのない彼らは、かんじきを履き脚絆をつけた遠征隊が遠くに現れると、「高麗紅軍」が来たといって、表にいる女子どもを家に呼び入れ、門を閉ざした。

日本帝国主義者がここの住民に反共宣伝を悪辣に行ったせいだった。

東満州ではついぞ体験したことのないことに考えあぐね

ていた主席は、大衆の中に入る方途を模索した。

主席は、各中隊の政治指導員に指示してハーモニカの上手な隊員を全部指揮処に集め、一人一人に吹かせてみた。

延吉中隊のある隊員は、聴衆が浮き浮きするほどハーモニカが上手で、アコーデオンの合奏に近い音を出すこともできた。

主席は、政治指導員にハーモニカ重奏団を引き連れて村に乗り込み、村人の心を動かしてみるようにと言った。そして、地下組織を通じてハーモニカを買ってくるよう当地の区党書記に頼んだ。

重奏団の活動は、村の中ほどにある農家の庭の雪かきから始まった。

だだっ広い庭に歩哨を立ててから、まず上演したのが、ハーモニカ2重奏だった。すると、近くの路地でコマを回していた2、3人の子どもが垣根の方に駆けてきた。ほかの路地からも、子どもたちがパジ(ズボン)をずりあげながら走ってきた。

2重奏は『総動員歌』から『児童歌』『どこまで来たの』と演目を変えた。

ハーモニカから流れ出る軽快な旋律に魅了された子どもたちは、手拍子を打ちながら一緒に歌った。村中を走り回って、間島から来た「高麗紅軍」がダンスを踊っていると大声で触れ回る子もいた。

それを聞いた大人たちが集まってきた。

中には近寄って「高麗紅軍」の「楽士」たちをしげしげと眺める者もいた。

観衆が4、50人になったころ、ハーモニカ重奏団は『アリラン』を吹いた。

その『アリラン』がとうとう村中の人たちを残らず誘い出してしまった。観客は100人、200人、そして300人と膨れ上がった。

この時、革命軍の隊員は彼らに政治宣伝をした。

すると、予想外のことが起こった。

あれほど心を許さなかった寧安の人民が、その日から遠征隊を貴賓として迎えたのである。

自ら作った『反日戦歌』

1935年1月のある日。

第1次北満州遠征を成功裏に終え、遊撃区へ帰っていた金日成主席は、天橋嶺のあたりで傷寒にかかった。

蜂蜜をとかした湯を飲み、暖かいオンドル部屋で汗を出せば傷寒は治ると言われていたが、海抜1000余メートルの無人の境では、そんなことは望めなかった。

その上、敵は一歩一歩死体を積み重ねながら執拗に攻め

寄せてきた。それは「討伐王」と呼ばれる工藤の中隊だった。工藤は満州で立てた戦功により死後、日本の「軍神」に祭りあげられた男である。

工藤は天橋嶺界線に現れて部下に、金日成は重病にかかって指揮能力を失った、だから、ことさらに戦いを仕かけるまでもない、戦闘はひかえ、共産軍があごを出すまで追撃しろ、そして一人ずつ撃ち倒してゆけば1カ月ほどで共産軍は全滅すると公言した。

隊員たちが主席の無事を祈り、肉弾となって敵陣への突撃を重ねたが、衆寡敵せずで、敵の追撃を振り切ることができなかった。

隊伍は次第に減り、16人しか残らなかった。

主席はしばらく気を失っては取り戻すことを繰り返していたが、ある日には朝に意識を失い、夜になっても目を覚ましていなかった。

「司令官同志、司令官同志が寝込んでしまったら、われわれはどうなるのです」

「隊長にもしものことがあったら、朝鮮は滅んでしまいます」

戦友たちは主席を取り囲み、声をあげて泣き出した。主席は、隊員たちのもどかしい叫び声に静かに目を開いた。

取り囲んだ隊員たちの顔を一人一人見入っていた主席は、みんな気持ちをしっかりもつんだ、われわれはいかなる環境

の下でも祖国と革命を先に考えなければならない、血の海と化した祖国を救えず、どうして目を閉じることができるだろうか、死ぬこともできなければ、死ぬ権利さえない、と言った。

翌日、意識を回復した主席は、隊員たちに歌詞を一句一句書き取らせた。

日本の軍靴の音は荒く
うるわしいわが祖国を踏みにじる
殺人放火　搾取略奪　屠殺の蛮行
数千万わが同胞を踏みしだく

愛するわれらのはらからは
敵の銃剣に血を流し
家財と田畑はことごとく
灰と荒れ地になりはてる

……

立て勤労者 肩を組み
不屈の意志もて戦わん
赤旗かざして白色テロ打ち砕き
勝利の凱歌どよめかさん

まさにこの歌謡が『反日戦歌』である。

隊員たちは金日成主席が作った革命歌謡『反日戦歌』を歌いながら、幾重もの敵の包囲を突破して天橋嶺を越えた。

趙宅周老の一家

第1次北満州遠征隊の隊員たちが意識のない金日成主席を背負ってたどり着いたのは、大崴子にある趙宅周老の家だった。

その家は、大崴子村から12キロも離れた深い山奥にあった。

老人の家族はみな、主席の看病に誠意を尽くした。

翌朝、主席は右の手首を軽く取っている老人の節くれだった手から、幼年時代、主席の額や頬を愛撫した万景台の祖父の暖かい手を感じた。

「ここは、どこですか？」

主席は低い声で老人に聞いた。

主席はとうとう意識を回復したのである。

老人のそばにまんじりともせずに座っていた伝令の曺曰男が涙をこぼしながら、自分らがその間に体験した数々の事のいきさつを一気に説明した。

「ご老人、ありがとうございます。おかげさまで命びろいをしました」

「いやいや、金隊長は天が下した将帥です。この丸太小屋で生き返ったのは、わしらの力ではなく、天命です」

「ご老人、お言葉がすぎます。私を天が下した将帥などとおっしゃるのはおおげさです。私は天が下した将帥ではなく、普通の農家に生まれた人民の子であり、孫です。朝鮮の軍人として、まだ、これといって国につくしてもいないのです」

「なんということを言われます。金隊長の立派な戦功を知らん者はおらんでしょう。わしは、こんな人里離れた山奥で焼き畑を起こしてやっと生きているつまらない人間ですが、東北三省のうわさだけはちゃんと聞いています」

その時、趙宅周老の家には息子、嫁、孫まで14人もの大家族がひしめいていた。

そういうところへ、それより多い隊員が居候をして火田民の乏しい食糧を減らすのは、道義にももとる非礼な行為だ、と主席は考えていた。

数日後、主席は趙宅周老が引きとめるのを振りきって、隊伍に出発命令を下した。

嫁の崔日華は、夜通しでこしらえた3日分の食糧、そしてシラカバの皮に包んだ唐辛子みそとにぎり飯を隊員たちの背のうに入れた。

主席は、「私は隊員の背中におぶさってお宅に来ました

が、こうして歩いて遊撃区に帰れるようになりました。おかげで病気を治し命びろいをしました。このご恩はいつまでも忘れません」と重ねて謝意を表した。

チョゴリの付け紐で目頭をおさえていた崔日華は、隊員の肩に背のうをかけてやりながら頼んだ。

「私はこれまで大勢の人の食膳をととのえてきましたが、金隊長のように礼儀をわきまえる方に初めてお目にかかりました。……世話なんかかけることもないのに、全快しない体で発つとは……。民衆を思うその心は本当に……。金隊長の健康をくれぐれも大事にお守りになってください……」

彼女の言葉は涙で途切れ途切れになっていた。

人間を愛せよ

第1次北満州遠征から帰った金日成主席は、病気をこじらせてしばらく病床にあった。

その時主席の胸は張り裂けそうだった。それは、自身の痛みよりも遊撃区が混迷に陥ったからであった。

当時、間島の遊撃区では反民生団闘争が極左的に進められていた。

主席が北満州への遠征に向かう時汪清に残した隊員のう

ちでも、中核といえる精鋭分子は全て除去されていた。数カ月前まで革命のために汪清の谷間も狭しとばかり駆けまわっていた人たちは、極左分子を呪い、遊撃区を捨てて四方に散って行った。

主席は、反民生団闘争の問題を正すための会議を招集するよう、東満党指導部に強く提起した。

そのしばらく後、大荒崴で会議を行うという知らせが届いた。

主席が病床を払って大荒崴に向かおうとすると、人々が反対した。

「粛反」を主管している者たちが血も涙もない木石漢で

民生団

日本帝国主義者が革命隊伍を内部から破壊するために1932年2月につくり出した反革命的スパイ・手先団体。

日本帝国主義者の差し金の下に民生団は、あたかも朝鮮民族の利益のために活動するかのように見せかけたが、実際は、朝鮮人民の反日意識を麻痺させ、朝鮮の共産主義者を陥れ、朝中人民の間にくさびを打ち込んで革命隊伍を内部から瓦解させることを目的とした日本帝国主義のスパイ・謀略団体であった。

日本帝国主義者の凶悪な謀略とそれに乗せられた満州省委や東満特委(東満党特別区委員会)、各級県党及び区党組織の責任ある地位を占めていた一部の「左」翼日和見主義者と分派・事大主義者の政治的野望によって、民生団の存在しない反民生団闘争が3年間も極左的に展開され、朝鮮革命に重大な弊害を及ぼした。

あることをよく知っている彼らは、主席の身辺を気づかったのである。

「諸君、これは死のうと生きようと発たねばならない道だ。もしも私が大荒崴へ行かなかったら、それは自滅を招くだけだ。われわれには朝鮮の共産主義者の運命を救い、朝鮮革命を危機から救い出す絶好の機会が訪れた。対決は避けられず、黒白はぜひとも明らかにしなければならない」

大荒崴会議はほぼ10日間にわたって行われた。

会議に参加した極左分子は、初日から東満州にいる朝鮮人はほとんどが民生団かその嫌疑者であり、遊撃区は民生団の養成所だと額に青筋を立てて大声を張り上げた。

主席は東満州で活動している朝鮮人革命家のほとんどが民生団であるなら、この会議に参加している私と他の朝鮮の同志たちもみな民生団だということになるが、だとすれば、あなたたちはいま民生団と対座して会議をしているのか、とつきつけた。

場内はざわめいた。

主席は、東満州に住む朝鮮人の70％が民生団だということは、老人と児女を除いた朝鮮人の青壮年全部が民生団だということにひとしいが、だとすれば東満州では民生団が革命をしており、民生団が自分の主人である日本との血戦を展開しているというのかと質問した。

聴衆はこの問いにも沈黙をもって答えた。

この時、曹亜範という者が、頭から民生団はいないと主張しているが、それは主観というものだ、監獄にはいま数百名の民生団嫌疑者が収容されている、彼らは自分の口で民生団に加入したことを自白しており、自分の手で自白書まで書いているが、これは何を意味するのか、と主張した。

主席は憤激してこう断罪した。

「私は監獄へ行って、自白をしたという数十名の嫌疑者に会ってみたが、その自白を認めた人は一人もいなかった。……

あなたたちはいま、民生団ならぬ民生団をほしいままにつくりだしているのだ」

主席は言葉を続けた。

「みなさん、もうこれ以上、人間の運命をもてあそぶのはやめよう。人間を人間として扱い、同志を同志として扱い、民衆を民衆として扱うのだ。われわれは人間愛と同志愛、民衆愛を武器にしてこの世の中を改造し変革するために立ち上がった闘士ではないか。この愛という武器がないなら、われわれはブルジョアジーや馬賊と変わるところがないではないか。これ以上『粛反』の名を借りて人々を愚弄するなら、人民は永遠にわれわれを遠ざけるだろうし、次の世代はわれわれを許さないだろう」

主席の切々たる言葉に曹亜範は頭を垂れた。

遊撃区を解散した動機

金日成主席は1935年3月の腰営口会議で、遊撃根拠地を解散し、広大な地域に進出して積極的な大部隊活動を展開するという問題を提言した。

この路線は、参会した絶対多数の軍・政幹部の支持を得たが、一部の人は次のような主張を持ち出した。

「遊撃区を解散するとは何たることだ。解散させてしまう遊撃区なら、なぜ建設したのか。食べるものも食べられず、着るものもまともに着られずに、なぜこの遊撃区のために3、4年もの間血を流してきたのか」

「遊撃区を解散し、人民を敵地へ行かせると言っているが、これは軍隊と一心同体になって生死を共にしてきた彼らを死地に追い込むことになるではないか。遊撃区という軍事的・政治的拠点を持たずに革命軍が遊撃戦を展開できるというのか。遊撃区で革命的に鍛えられた人民が敵地に行くというのは、われわれが手塩にかけて育てた数万名の革命大衆を失うことになるではないか」

このような言葉にうなずく人々もいた。

そうして、人々は遊撃区死守論者と解散論者に分かれて

論争を繰り広げた。

　遊撃区を解散するのは、金日成主席にとっても胸の痛むことだった。

　しかし主席が涙をのみ、遊撃区の解散を決心したのは何のためなのか。

　当時の実情で解放地区形態の固定した遊撃区で膨大な軍事的潜在力をもつ強敵を相手に長期間の正面対決をするというのは、冒険主義としか言いようがなかった。

　すでに包囲されている遊撃区の防衛にのみ没頭するなら、結局革命軍は軍事的に守勢に立たされ、敵との絶え間ない消耗戦に引きずりこまれて多年にわたって育成した革命勢力も保持できない恐れすらあった。つまるところ、遊撃区の軍民全てを立体戦によって圧殺しようと狂奔する敵のもくろみに調子を合わせる結果を招くのみであった。

　それで、主席は遊撃区の解散に関する方針を打ち出したのである。

　主席は会議で、遊撃区死守論を唱えた自尊心の強い男たちをとうとう説き伏せてしまった。

　遊撃区解散の問題は会議で決定として採択された。

3. 積極的な大部隊活動で

人民を害する者は許さない！

四道溝は羅子溝から8キロ余り離れている小さな村落である。

金日成主席は、羅子溝と隣接しているこの村を革命村にする目的から、ここに反日会、農民協会などを組織した。

そうして、四道溝村は汪清遊撃区を守る上で重要な役割を果たした。

満州国軍

満州を占領した日本帝国主義者がかいらい満州国をでっちあげた後につくり出した満州国軍。

日本帝国主義者は1932年3月、満州にかいらい満州国をでっちあげ、この一帯における朝中人民の革命闘争を弾圧する目的から満州国軍をつくり出した。

徹底したかいらい軍である満州国軍は、日本帝国主義の大陸侵略戦争の遂行に積極的に加担し、人民の抗日救国闘争を無分別に弾圧した。また、日本帝国主義侵略軍の手先として朝鮮人民革命軍と遊撃区に対する討伐に参加し、至るところで罪なき人民を野蛮に弾圧した。

満州国軍は、1945年の日本帝国主義の敗北、満州国の崩壊と共に消滅した。

この村が1935年陰暦1月15日の早暁、靖安軍部隊の「討伐」によって一朝にして焼け野原に変わってしまった。

当時、東寧県老黒山の王宝湾に駐屯していた300余名の靖安軍は、ほとんどが地主、資本家の子弟で組織された悪質な満州国軍で、日本侵略者が「鉄軍」だと誇る「精鋭」部隊だった。

四道溝村が革命村になったことを内偵したこの部隊の殺人鬼は、人々が深い眠りからまだ覚めやらぬ早暁に村を包囲し、重機、軽機の一斉射撃で村人を手当たり次第になぎ倒した。

靖安軍

かいらい満州国のかいらい軍の中でも最も悪質かつ反動的な軍隊。

満州国政府の直属部隊であり、地主、資本家出身の日本の手先で組織された。指揮官のほとんどは日本侵略軍の現役将校で、下士官と機関銃手の中にも戦闘経験のある日本軍の兵士が少なくなく、兵士も系統的な正規訓練を受けた者たちだった。

靖安軍は、人民への弾圧と朝鮮人民革命軍や反日部隊の討伐に積極的に参加した。しかし、靖安軍は老黒山戦闘など多くの戦闘で朝鮮人民革命軍の大きな打撃を受け、惨敗だけを繰り返した。

1945年8月、日本帝国主義の敗北と共に崩壊した。

銃声に驚いて外へ飛び出してくる人々に機関銃を乱射し、死体を銃剣で刺して家の中に投げ込み、火をつけた。

数十戸の村で生き残った人は、わずか数人に過ぎなかった。

6月中旬、主席は老黒山で四道溝惨劇を引き起こした靖安軍部隊を掃討する戦闘を指揮した。

主席は誘引伏兵戦法を使うことにし、敵の目につくようにわざわざ白昼に部隊を羅子溝へ撤収させた。敵をして遊撃隊が他の方面に撤収したものと思い込ませる計略だった。

そしてその夜のうちに、部隊をひそかに靖安軍の駐屯している王宝湾付近の樹林の中に移動させ、要撃の陣を張らせた。

そして10名余りの隊員を山林隊に変装させて王宝湾へ送り込んだ。

村へ行った彼らは、住民のロバを奪い、野菜畑の柵を引き抜いたりし、騒ぎを起こして引き揚げてきた。

しかし、最初の日はどうしたわけか、靖安軍はその手に乗らなかった。

主席は翌日、再び誘引班を派遣した。

やっと靖安軍の一群が誘引班を追跡しはじめた。

敵が全員谷間に入ってきたのを見届けてから、主席は日本人指導官に狙いを定めて一発のもとに撃ち倒した。

瞬間、敵の心臓を狙っていた遊撃隊員の銃口が一斉射撃

の火を吐いた。

四道溝人民の恨みを晴らす復讐戦が始まったのである。

完全に包囲された敵は、八方ふさがりの境遇に立たされた。

四道溝人民を無残に虐殺した100余名の殺人悪党は、わずか数分のうちに全滅した。

老黒山の谷間を震撼させた革命軍の銃声は、人民の利益を侵害した敵には容赦と寛容がないことをはっきり示した厳しい宣言だった。

大火焼舗河に響いた砲声

老黒山戦闘で大勢の死者を出した日本帝国主義者は、関東軍、満州国軍、警察、自衛団まで総動員して朝鮮人民革命軍の駐屯している太平溝への攻撃を企んだ。

金日成主席は、無謀に攻め寄せてくる敵を大火焼舗河に追い込み、老黒山戦闘で鹵獲した迫撃砲で撃滅することを決心した。

1935年6月、敵はついに太平溝への攻撃を開始した。

主席は、太平溝の裏山に部隊を散開させ、迫撃砲中隊の近くに指揮部を定めた。

敵は船に乗って大火焼舗河を渡河しはじめた。

主席は、船が一番水深の深い川の真ん中に入った時、砲撃命令を下した。

迫撃砲中隊が砲門を開いた。1隻の敵船がこっぱみじんになった。度胆を抜かれた敵は渡河を断念し、ほうほうの体でもとの陣地に逃げ去った。

主席は迫撃砲中隊長を抱きかかえて勝利を祝った。

大火焼舗河に鳴り響いた人民革命軍の砲声は、わが国の砲兵武力の誕生を告げる歴史的な呱々の声だった。その砲声に敵は震えあがった。

大火焼舗河の渡河を企図して迫撃砲の攻撃を受け、羅子溝へ逃げ帰った満州国軍は、「まったく七不思議の一つが人民革命軍だ。昨日鹵獲したばかりの火砲で、今日はたった2発目に命中させる神技をもっているのだから、それにどう対抗できるというのか。人民革命軍に刃向かうというのは愚の骨頂だ。これからはおれの首に日本刀が飛んできても金日成部隊とは戦わない」と悲鳴を上げた。

北満州に響いた迫撃砲の砲声

1935年6月中旬、北満州の形勢は朝鮮人民革命軍主力部隊がそこへ進出して、反日闘争の炎を燃え上がらせることを

切実に求めていた。

金日成主席は反日連合戦線の実現のために第2次北満州遠征を断行した。

7月、山東屯に着いた主席は、抗日連軍第5軍長の周保中と感激的な対面をした。

周保中は、密営から4キロ余り離れたところまで駆け付けてきて主席を親切に出迎え、その日から主席と同行した。

そんなある日、主席は敵の大部隊が襲いかかってくるという報告を受けた。

その時第5軍の主力は穆棱と寧安県の西北方へ進出していたし、第4軍の兵員もわずかなもので、数量の上では敵側が遊撃隊より2倍ほど優勢だった。

どうするだろうか、戦うべきか、避けるべきか。

周保中は当惑して主席の意向を尋ねた。

主席は戦うことを決心した。

主席は、北満州で一度朝鮮人民革命軍の威力を誇示するのは、遠征の目的達成に必須の要件であると考えた。

それなら、勝算はあるのか。いくらでもあった。

主席は、太平溝戦闘で威力を発揮した迫撃砲を用いる時がきたと考えた。それをもって傲慢に襲いかかる敵に一泡吹かせることを決心した。

主席は人民に被害が及ばないようにするため、敵が山東

屯に攻め入る前に迎えて撃てるように陣地を定め、各部隊に必要な戦闘任務を与えた。一方、迫撃砲中隊の砲手と重機関銃中隊に、敵の進攻路と目される方向を制圧するための射撃諸元を決めて命令を待つようにした。

谷間づたいの道を恐ろしい速さでやってきた敵は、山東屯西北方の地域を占めようと山を登ってきた。

敵が前方150～200メートルの近距離まで近づいた時、戦闘開始を告げる主席の銃声と共に遊撃隊員たちは猛射を浴びせた。

生き残った敵は退却し、涼水嶺子村河をへて南側の尾根づたいに再び進攻を試みたが、そこでも道筋に待機していた遊撃隊員たちが痛快に撃ち倒した。

戦場を注意深く見守っていた主席は、今回は重機関銃中隊に射撃命令を下した。

重機関銃がけたたましい音と共に敵を容赦なく撃ち倒した。

突然の重機関銃の乱射に敵はあわてふためいた。

しかし、敵は自軍の死体を踏みながら悪辣に襲いかかってきた。

主席は迫撃砲中隊に射撃命令を下した。

天地を揺るがす轟音と共に砲弾が金属音を立てて敵陣に飛び、続けざまに炸裂した。

敵陣は大混乱に陥り、阿鼻叫喚の巷と化した。生き残った敵は退却しはじめた。

主席は、逃げる敵に砲門を向けるよう命令した。

敵は硝煙の中をさ迷い、夕闇にまぎれ算を乱して逃走してしまった。

この戦闘で惨敗して以来、敵はあえて朝鮮人民革命軍に戦いを挑もうとしなかった。さらには、遠征部隊が送る手紙を見て、食糧、食用油、靴などの軍需物資を送ってよこしさえした。

人民革命軍の砲声に敵は戦慄したが、人民の反日熱意は一層沸き立った。

遊撃隊を「密告」した百家長

金日成主席の率いる第2次北満州遠征隊が額穆地方の青溝子の4号部落にとどまっていた時のことである。

青溝子は、日本侵略軍の本拠地である額穆県城からそれほど遠くないところに位置している地域で、4号、5号、6号、7号など幾つもの小さな部落からなっていた。

その4号部落に劉永生という百家長がいた。

彼は、人民には負担をかけずに夜ごとたき火を囲んで娯

楽会に興じ、踊りもすれば学習もする遊撃隊を見て、変わった軍隊だと思った。

彼が見なれてきた軍隊というのは、表看板にはかかわりなく、いずれも人民に目をいからせ、怒鳴りちらす類のものだった。

ところが、間島から来たこの「高麗紅軍」が住民の水汲みを手伝い、庭を掃き清め、子どもの頭も刈ってくれるのを見て、本当に不思議なことだと思った。

そんなある日、百家長は6号部落に駐屯している日本軍守備隊と満州国軍が4号部落方面へ押し寄せてくる準備をしているという情報を入手した。彼は直ちにそれを主席に通報した。

その通報を受けた主席は、全部隊に就寝の号令をかけた。

百家長はそれを見て、また不思議に思った。彼はいまにも村に敵軍が襲ってくるような気がして、一晩中寝つけず、せわしく出たり入ったりしていた。

主席は彼の手をとって座らせ、こう言った。

「わが軍が村をしっかり守っているのだから、心配しないでぐっすり休んでください」

「宵の口から布団にくるまる軍隊がどうやって村を守るというのですか？」

百家長は不安を振り払うことができず、そわそわしていた。

「歩哨が立っているではありませんか。『高麗紅軍』はうそをつきませんから、今晩はぐっすり休んでも大丈夫です。そのかわり、明日の朝われわれが出発したあとで、敵のところに行って、『高麗紅軍』が村に立ち寄ったと届け出てください。百家長さんがご覧になったとおり話せばよいのです」

百家長は飛び上がらんばかりに驚いた。

「届け出るなんて。私は『高麗紅軍』のような立派な軍隊を密告するつもりはありません」

「いや、百家長さん。私が本気で頼んでいるのですから、そのとおりにしてください。それでこそ、われわれが助かり、百家長さんも村も助かるのです。あとでそのわけがわかるでしょう」

警察に「高麗紅軍」の動きを逐一密告させたのは、集団部落内に閉じこもっている敵を外へおびきだすためだった。また、遊撃隊が村を発ったあと、人民が被害を受けないようにするためだった。

翌日の未明、百家長は息を切らしながら敵に駆け付けて叫んだ。

「あのう、間島から来た『高麗紅軍』が5号部落の方へ……」

「本当なのか？」

百家長の「届け出」を受けた敵は、数百人の討伐隊を繰り出して、遊撃隊をすさまじい勢いで追撃してきた。

しかし、朝鮮人民革命軍が討伐隊を壊滅させるために待ち伏せをしているとは夢にも思わなかった。

この戦闘に投入された日本軍守備隊は全滅した。遊撃隊の弾幕からかろうじて一人の守備隊員が生き残り飛行機の救助を受けたが、その飛行機も着陸時に事故でこっぱみじんになったので、その一人まで「天国」行きとなったわけだ。

日本帝国主義はその後、青溝子6号部落にこの日の戦闘で死んだ戦没者を追悼して「忠魂碑」なるものを立てた。

奇しき巡り合い

1936年の初めのある日、山の向こうに夕陽が沈みかけていた頃、1台の馬車が額穆のある地主の家の前に止まった。

馬車からは貴婦人が兵士に伴われて降りた。

彼女は門の前に下男を装って歩哨に立っている人民革命軍隊員に少し暖をとらせてもらいたいと言って、まっすぐ中に入ろうとした。

その時、家の中では金日成主席が隊員たちと共に休息していた。

キツネの毛皮のコートを二重にまとっている上、満州国軍兵士の警護を受けていることから、身分の高い貴婦人に違いないと決め込んだ隊員は主席にこのことを報告した。

主席は、彼女を部屋に通すよう指示した。

彼女に茶を勧め、火鉢も身近に押しやった主席は、われわれはこの土地の人たちが「高麗紅軍」と呼んでいる人民革命軍です、われわれは日本人が宣伝しているように、人民の生命と財産を侵害する匪賊の群ではありません、われわれは朝中両国を侵略している日本帝国主義者とその手先に反対して戦うだけであって、人民の生命と財産には指一本もふれません、ですから、安心してください、と言った。

この時、一隊員が主席に、彼女が里帰りをする満州国軍連隊長の妻だとそっと報告した。

主席は少しも顔色を変えず、彼女と談話を続けた。

ところが、しばらく後主席を見上げていた彼女はびっくりした。

「……私の勘違いでしょうか……　　隊長さま、失礼ですが、金成柱というお名前ではありませんか？……」

思いがけない質問に、今度は主席が驚かされた。

間島から数十里も離れた北満州で偶然巡り会った見知らぬ貴婦人が主席の幼名を知っているとは、謎のようなことであった。

「ここ額穆で幼名を呼ばれて、妙な気がします。私は金成柱（キムソンジュ）でもあり金日成でもあるのです。しかし、どうして私を知っているのですか？」

「成柱先生が吉林で青年学生運動の指導をなさっていた時、女学校に通っていたのです」

「そうでしたか。これはなつかしい」

ついで彼女は、自分も吉会線鉄道敷設反対キャンペーンの時に学生デモに参加したことと、その時金成柱先生の演説を聞いたことがまざまざと思い浮かぶと言った。そして、こうして軍服を着ている成柱先生を見ると感慨無量で、恥ずかしくてならないと言って、涙を流した。

主席は彼女に、気を静めてくれ、自分をそんなに卑下してはいけない、と言った。

「内外の情勢は、祖国を愛し人民を愛する中華の全ての息子、娘と知性人を抗日救国の広場に呼んでいるのです。連隊長の妻になったからといって、抗日が不可能だという法はないではありませんか」

「では、私のような境遇でも抗日に参ずる活路はあるというのですか？」

「ありますとも。あなたが夫によい影響を与えて、革命軍の討伐をやめさせるだけでも、それは抗日に貢献することになります。……要は自分が中国人であるという

ことを忘れないことです」

大きなショックを受けた彼女は、夫も連隊長とはいえ、好き好んで務めているわけではない、夫も民族的良心だけは深く抱いているから、夫をよく説得して、遊撃隊の討伐に部下を出動させないようにするつもりだ、と言った。

彼女は、きょう成柱先生に会えたのは天が下した幸運だ、先生はきょう私に吉林時代の魂を呼びもどし、私たち夫婦を再生の道に導いてくれた、この恩は一生忘れない、と言って中華民族の娘として正しく生きていくことを誓った。

その後、妻に感化されて満州国軍連隊長は積極的な反日闘争に出た。

勝利者の祝宴

満州大陸随一の景勝である鏡泊湖の南側の湖畔に、南湖頭と呼ばれる小さな村があった。

南湖頭というのは、湖水の南の先端にある村という意味である。この湖水の北側の湖畔にある村は北湖頭という。湖水に注ぐ小家琪河の流れに沿って数里さかのぼっていくと、深い渓谷のさる山腹に古びた2棟の丸太小屋があった。

その1棟で1936年2月下旬、南湖頭会議が開かれた。

会議には3、40名の朝鮮人軍・政幹部と、コミンテルンへ行って来た魏拯民をはじめ中国の革命家が参加した。

魏拯民は参会者たちに、金日成主席が大荒崴会議と腰営口会議で提起した一連の問題に対するコミンテルンの見解と指示を伝達した。

参会者たちは、彼が病躯をおしてモスクワまで行き、望ましい結論を受けてきたことに深い謝意を表した。

主席は報告で、1930年代前半期に豆満江沿岸で展開してきた軍事・政治活動の経験を総括し、革命の新たな転換期を迎えた時期に応じて朝鮮の共産主義者に提起される重要な課題と、それを遂行するための新たな戦略的方針を示した。

すなわち、朝鮮人民革命軍の主力部隊を国境地帯と白頭山地区に進出させ、闘争の舞台を徐々に国内へ拡大する方針、反日民族統一戦線運動を拡大する方針、党創立の準備活動を積極的に推進する方針など、抗日武装闘争とそれを中心とする朝鮮革命全般を一大高揚へと引き上げる新たな方途を示し、それを討議にかけた。

大部隊を編制して白頭山地区へ進出させるという主席の提案に、参会者は興奮を抑え切れなかった。

会議ではまた、全国的範囲で祖国光復会を組織し、共産党創立のための活動を推進するという主席の戦略的方針が採択された。

南湖頭会議は、勝利者の祝宴とも言えた。

初期の共産主義者の派閥争いと朝鮮共産党の解散や、反民生団闘争での「左」翼日和見主義者の誤謬のため、コミンテルンからも、兄弟諸国の党からも敬遠され、部分的ではあれ朝鮮人民からも敬遠された朝鮮共産主義運動は、南湖頭会議を契機に以前の欠点を払拭し、上昇一路をたどることができるようになった。

4. 新しい師団の誕生

喜びの中にひそむ悲しみ

南湖頭会議から数日後、白頭山地区への進軍を決心した金日成主席は、青溝子密営に向かって出発した。

後方密営のある青溝子には、北満州遠征に参加した隊員と、東満州から来た遊撃隊員、虚弱者、傷病兵、両親を失った子どもたちがいた。

主席は、密営内の軍民全員を集めて南湖頭会議の決定を伝えた。

コミンテルンが間島でのそれまでの反民生団闘争が極左的であったことを認め、朝鮮人が朝鮮革命を遂行するのは誰も妨げることのできない神聖不可侵の権利であると宣言したことを話すと、これからはわが国、わがふるさとの地を踏み、生まれ故郷の祖国で日本帝国主義との決戦ができるようになったと誰もが涙を流して喜んだ。

彼らの中に北満州に残されると思っている人は、一人もいなかった。

けれども、主席はつらくとも別れについて話さなければならなかった。

「諸君、振り返って見よ！

武装闘争の弁証法的過程として新たな情勢が到来するたびに、われわれには決まって別離がめぐってきた。

南湖頭会議を契機に、朝鮮革命の転換期が到来した今日に至ってもそれは例外とならない。したがって諸君は、いまもまた別離を覚悟しなければならない。日本の軍部ファシスト集団は『2・26事件』を起こした後、北方に対する侵略を一層本格化している。日本帝国主義がチチハルと北部中国を掌握し、ソ連侵攻の口実を設けようとたえずソ満国境で挑発行為を働いているのは、諸君もよく知っている事実である。北満州の各遊撃部隊はこれに対処して、抗日勢力を強化するために努力している。ところが彼らは、幹部の不足で大きな困難に直面している。そのため、何回もわれわれに支援を求めてきた。

このような状況下で、われわれ全てが白頭山方面に進出するとすれば、どのような結果がもたらされるだろうか」

主席はついで、南湖頭を発つ時から数十回も考えてきた人事異動を発表した。

主席の命令に不服という言葉さえ知らなかった隊員たちが、主席のそばに残りたい、主席に従って祖国に行きたいと涙を流しながら我を張るので、主席は数時間にわたって説得を重ねざるを得なかった。

あれほど行かないと強情を張っていた戦友たちも、さすがに別れを前にしては努めて笑顔を見せた。

胸をえぐるような惜別の情にたえ、顔に笑みをたたえて去った戦友たちの心の中には、解放された祖国に主席と共に行く固い決心がみなぎっていた。

母の墓はすぐそこなのに

金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍部隊が白頭山地区に向けて行軍し、安図付近を通っていたある日。

主席の眼前に見慣れた僻村が開けた。

連々と続く峰々を眺めている主席の視野の彼方に、抗日遊撃隊の創建を宣言した小沙河の台地が浮かんできた。あの台地から少し下った陽当たりのよい山すそに康盤石女史の墓があった。

隊列が峰を降りたのも知らずに、主席は尾根に立ちつくしていた。

麓に向かっていた伝令が戻ってきて、いぶかしそうに主席を見つめた。

「将軍、なぜ山を降りないのですか？」

主席はようやく冥想からさめ、歩みを移した。

「どうなされたのですか？　小沙河に母上のお墓があると聞きましたが、もしや……」

「そうだ、母のことを考えていたのだ……」

「それなら、お墓参りをしてはどうですか？」

彼の言葉に、主席の心の中では母への思いが一層つのった。

しかし、主席はかぶりを振った。

「行きたいのはやまやまだが、時間が許さない」

「小沙河はすぐそこなのに、時間がないからといって母上のお墓参りもなさらないというのはあんまりではありませんか。土器店谷には弟さんもいるはずですが……」

「たとえ時間が許すとしても、私は行けない身なのだ。母がそれを望んでいないのだから」

伝令は小首をかしげた。

「本当におかしいですね。なぜ望まないと言われるんですか？」

「母は、私が朝鮮の独立を成し遂げるまでは墓を移してはいけないと遺言したのだ。私がいま土器店谷の墓に行かないのは、その遺言を大切にしているからだ」

幼い伝令の目には涙が光っていた。

彼は、「お墓参りをしたからといって、朝鮮の独立ができないということはないじゃありませんか。遺言は遺言として、行ってこられるべきです」と切々と言った。

「いや、それはだめだ。私は母が生きていた時に孝行ができなかった。せめて亡くなったあとにでも孝行をしたいと思っているのだから、もう言わないでくれ。これといって成し遂げたこともないのに、どうして母のもとへ行けるというのだ」

部隊の指揮官たちも主席に小沙河へ行くよう勧めた。

だが、主席は彼らの提言を聞き入れず、峰を降りた。

不死の薬

南湖頭から白頭山に向かう路程の中で、金日成主席が目指す重要な目的地の一つは、牡丹嶺山脈に位置する朝鮮人民革命軍独立第1師の後方密営基地——迷魂陣であった。

一、二度来たことのある人でさえ、方向を見失って立ち往生してしまうという深山幽谷の迷魂陣。

主席の率いる隊伍も、はじめは密営をすぐ探し当てることができなくて右往左往し、幸いに、独立第1師の隊員たちに会った。

主席は彼らに密営までの道案内を頼んだが、彼らはそれを聞き入れようとしなかった。

「将軍、その迷魂陣はいま、腸チフスが蔓延して汚染区域になっています。そんなところへ行っては絶対にいけません」

「腸チフスも、人間の体に生じるものであるから、人間がいくらでも処置できるものだ。人間が伝染病を征服するのであって、まさか、伝染病が人間を滅亡させることはあるまい。……」

「人間が伝染病を征服するとはとんでもないことです。あの病気には強者も弱者もありません。

あの強健な崔賢中隊長でさえ腸チフスで何週間も寝込んでいるくらいです」

「なに、あの鋼鉄のつわものが伝染病にやられたというのか。彼が腸チフスで苦しんでいると知っては、なおさら行かなくてはならない。……」

主席は迷魂陣密営に到着するやいなや、50余名の熱病患者が収容されている病棟を訪ねた。

「……お願いです。入ってこないでください！　ここに入ってきてはいけません！」

骨だらけのやつれた崔賢はやっとの思いで床から起き上がり、戸口の方に這い出してきながらあわてて叫んだ。

主席は、崔賢に近寄って毛布の下に引っ込める彼の手を強く握った。

崔賢の目にまたたく間に涙がにじみ出た。病棟はたちまち嗚咽の場と化した。

その後、病魔にとりつかれていた熱病患者たちは、自信を持って治療に専念し、床を上げることができた。

同志のためには死をもいとわない主席の熱い同志愛がそのまま不死の薬となったのである。

焼却した調書包み

1936年の春、金日成主席は朝鮮人民革命軍の新しい師団を編制するために馬鞍山に行った。

新しい師団への編入が予定されている第2連隊は蛟河方面

に遠征し、馬鞍山には数人の隊員と第1師政治主任だけが残っていた。

主席は、政治主任の金洪範に尋ねた。

「馬鞍山に残っているのは君たちだけか？　君たちはここでなにをしているのだ」

「あの参圃密営には100余名もの民生団がいるんです。彼らを監視するために私が残っているのです」

大荒崴、腰営口会議から1年近い歳月が流れ、「粛反」が間違っているということは東満州の革命家はみんな知っているのに、ここではいまだに民生団を云々しているのは驚くべきことだった。

主席が何の証拠でもあるのかと聞くと、金洪範はみな証拠文書のある連中だと言い、暗い部屋の隅から大きな調書包みを引き出した。

自白書、陳述書、尋問調書……

調書包みはなんと一部屋を埋めつくすほどの量であった。

その調書には、民生団嫌疑者のものものしい「罪状」が克明に記されていたし、拇印まで押されていた。

主席は、参圃密営に赴いて民生団嫌疑者たちに会った。

主席は、民生団嫌疑の調書を調べてみた、調書だけでみなさんに対する判断を下すことはできないと考えた、だから、すすんで心の内を打ち明けてもらいたい、と言った。

しかし、誰も口を開こうとしなかった。

幾人かを指名して民生団に加担したというのは事実かと

尋ねると、みなそのとおりだと答えた。

主席は、胸のふさがる思いがして外に出て林の中を歩いた。

主席は再び丸太小屋に入り、力をこめて言った。

「みなさん、顔を上げなさい。私は君たちの罪を追及し判決を下すために来たのではない。白頭山へ行って共に戦う戦友を訪ねてきたのだ。……ところが、ここにいる人たちはみな、私の戦友になれない親日逆賊であり反動分子であると言っている。私はそれを信じることはできない。……君たちが自分の口で話してみたまえ。本当に君たちは日本帝国主義のために何年もの間求めて苦労をしたのか。氷と雪に覆われた満州の広野で露を枕に野宿してきたのは、日本の犬となり肉親と同志を害するためだったのか。……」

水を打ったように静まり返っていた場内のあちこちからむせび泣く声が聞こえた。肩を震わせながら嗚咽する100余名の人々……

「私は日本人の犬ではありません！　民生団ではありません！」

「私も違います！」

主席は政治主任を呼び、民生団の調書包みを焼却する準備をするようにと指示した。

顔面蒼白になった政治主任は脚を震わせた。

彼は「黙認」の責任を問われ、銃殺されるかも知れなかった。

主席も、この決心がいかに危険千万なものであるかを十分承知していた。

しかし、決心は一層固くなった。

主席は、100余名の民生団の嫌疑が完全に晴れたことを言明すると同時に、彼ら全員が朝鮮人民革命軍主力部隊の隊伍に加わったことを宣言し、呪うべき調書包みに手ずから火をつけた。

比類ない胆力と度胸をもっている20代の青年将軍の大勇断であった。

このように新しい師団は、罪悪に満ちた不信の文書を一握りの灰にした炎の中から生まれた。

20元

1936年の春、金日成主席は新しい師団を編制した後、馬鞍山にある児童団員たちの密営を訪れた。

主席が密営に到着すると、馬鞍山の児童団員たちは「将軍様！」と叫びながらわれ先に丸太小屋から飛び出してきた。

息を切らして駆けよってきた子どもたちが突然、主席から少し離れたところに一人、二人立ち止まった。

丸太小屋の前へ歩いていた主席も、子どもたちが立ち止まると、その場に足を止めた。

子どもたちの痛々しい姿が目に映ったのである。飢餓でむ

くんだ顔、焦げたり破れたり、すり切れたりした、ぼろか雑巾に近いものを身にまとった裸も同然の子どもたち……。

主席は、心の痛みをやっとこらえながら言った。

「みんな顔を上げるのだ。ぼろを着ているのはおまえたちのせいではない。さあ、早くおいで！」

主席が両腕を大きく広げて子どもたちに近づくと、子どもたちは主席を取り囲み、声を上げて泣き出した。

主席は涙を流す子どもたちを連れて兵室に入った。

その中の状況はより惨めなものだった。冷え冷えとした部屋の中に数人の子どもが、毛布もかけずに片隅にうずくまるようにして横たわっていた。

子どもたちの額に手を当ててみ、顔色もうかがった主席は、どうして病気にかかり、何の治療を受けたのかを詳しく聞いた。

金洪範と馬鞍山密営の隊員たちは一言も発することができなかった。

実際、この子どもたちが病床に臥していたのは病気よりも、人間性を失い、子どもを排斥した民族排外主義者と極左分子の罪業のためだった。

主席は、今こそ母が臨終を前にして遺産として渡した20元を使うべき時だと考えた。

（お母さん、このお金をいただいてお母さんのもとを離れてからもう4年になります。その間、何回も苦しい目に会いながらも将来のことを考えてなんとか取っておいたのですが、きょうはどうしてもこの20元を使わなければならなくなりました。この世に一人の肉親もいない、あのかわいそうな子どもたちに服をつくってやりたいのです。……）

遠い土器店谷の冷たい山すそにひとり寂しく眠っている母親に向かって、主席は心の中でこうつぶやいた。

そして、連隊政治委員にこの20元で布地を買ってきて子どもたちに服をつくってやりたいと言った。

最初の女性中隊

金日成主席は、朝鮮人民革命軍の主力部隊である新しい師団を編制する時、女性隊員で中隊を別に組織することを決心した。

しかし、何人かの指揮官は首をかしげた。

「女性だけで満足に戦闘ができるでしょうか。女性だけでは狂暴な日本軍を相手に戦えそうにありません。中隊と小隊の指揮を男子が受け持ってやるなら話は別ですが……」

そんなある日、迷魂陣密営から男女混成部隊が漫江付近に到着した。

男女混成とはいっても、男子は4、5名にすぎず、あとは全員が女性だった。

主席は、怪力といわれている男子隊員を呼んで、まず一女性隊員の背のうと銃を背負わせ、その状態で休憩せずにどれくらい行軍できそうかと尋ねた。

彼は4キロくらいは休まずに行けそうだと答えた。

次に主席が、それより重い他の女性隊員の荷と2挺の套筒を担がせ、これならどれくらい行軍できそうかと聞くと、せいぜい2キロくらいだと答えた。

一行のうち、一女性隊員が主席に言った。

「大蒲柴河から漫江までその荷を担ぎ、休みなしで行軍してきました」

大蒲柴河から漫江までならほぼ40キロの距離である。

主席は彼女らの戦闘談についても聞かされた。

彼女らは司令部を訪ねてくる途中、食糧が切れて苦労した末に山中である反日部隊に会い、彼らとの共同作戦で大蒲柴河付近の集団部落を奇襲した。

この戦闘で反日部隊は立派な新式小銃をもっていたにもかかわらず、退却していた敵が反撃に転ずるや、臆病風を吹かして逃げ出した。しかし、女性隊員は旧式の套筒で敵を物の見事に撃破した。

女性隊員の勇敢な姿を見て感動した反日部隊の隊員たち

は、戻ってきて追撃戦に加わった。こうして戦闘は勝利のうちに終わった。

女性に対する誤った認識をもって女性中隊の編制を快く思わなかった指揮官たちは、自分らの主張を撤回せざるを得なくなった。

1936年4月、主席は漫江付近の林の中で、司令部を訪ねて各地から集まってきた女性隊員で中隊を編制した。

この女性中隊は、わが国の建軍史上初めての女性戦闘区分隊であった。

女性中隊の誕生は数千年来、宿弊となっていた男尊女卑の思想と因習を打破し、女性の精神的・社会的地位を実際に男子と同等の地位につけた一つの出来事だった。

「パイプじいさん」の入隊志願

1936年3月下旬、和竜地方で活動していたある小部隊が金日成主席のところへ帰っていた。ところが彼らは、しつこく後をついてくる正体不明の男のためにかなり手を焼いた。

「おや、本当についてくるつもりですか？　早く家に帰りなさい」

「そう言わないで。君たちは君たちで行くがいい。私は

私で行くから気にすることはない」

　このようなやりとりを続けながら主席のいる山間村落にたどり着いた小部隊は、妙な人を連れてきたわけをすぐ主席に報告した。

　農家で薪を割っていた主席は、早く彼を呼んでくるようにと言った。

　金日成将軍に会わせると言われてパイプを握りしめて駆け付けてきた男は目を丸くした。

　案内する指揮官が、庭で薪を割っている方を指すのではないか。

　男は即座に、後ろに立っている指揮官を横目でにらんだ。

　「本当に司令官同志です」

　「いくらなんでも金将軍がそんなに若いはずはない。それに、将軍ともあろう方が作男のように粗末な服を着て薪を割るなんて話にならん」

　かたくなに言い張る男の言葉を聞いた主席は、笑いながらやりかけの仕事を止めた。

　彼の手を温かく取った主席は、やさしく挨拶の言葉を言った。

　（まさか、この方が……？）

　「金将軍について巷のうわさはよく耳にしていました。あまりうわさが高いので、どんな方なのか会ってみようと思って訪ねてきました」

　彼がまさに「パイプじいさん」と呼ばれた李東伯である。

　数日間、迷魂陣で李東伯と虚心坦懐な話を交わした主席は、もう家に帰ってはどうかと言った。

　ところが、答えの代わりに差し出したのは漢字交じりの入隊申し込み書だった。

　「その年でどうやって一緒に行動できるというんですか？」

　「心配には及びません。乙支文徳や李舜臣の麾下には、私より一倍半も年をとった兵卒もいたんです。だから年齢は入隊拒否の理由にはなりません」

　「和竜の奥地で帰りを待つ奥さんと子どもたちは、誰が面倒を見るんですか？」

　「流刑もいざ行けないとなると残念がるというんじゃありませんか。まして、救国の大業に一身をささげるつもりの私に、家に帰れというんですか。将軍も、病の母上と幼い弟さんたちの面倒をみてくれる人がいたから国を取りもどす戦いに身を投じたわけではないでしょう？」

　主席はやむを得ず彼の入隊を承諾し、それを記念して2年間愛用してきた拳銃を与えた。

　「私が将軍のもとにとどまるのはなぜだか分かりますか？」

　主席が知りたがる表情をすると、李東伯は得意になって語りだした。

「第一はもちろん将軍の高明な経綸であり、第二は将軍の縫い繕ったズボンと迷魂陣の熱病患者の泣き声でした。……

朝鮮革命の真の主人、朝鮮の運命に責任を持つ真の主人、真の指導者を見出したこと、これが私をここにとどまらせた根本的な理由なのです。机上の空論、空理空論をしないこと、将軍はこの長所一つだけでも私のような田舎書生を十分に感動させることができたのです」

李東伯を見つめていた主席は、笑いながら3番目の理由もあるかと冗談半分に尋ねた。

「もちろん、ありますとも。それは将軍の創造的で実践的なものの考え方と革命勝利への揺るぎない信念です」

これが一枚の紙には書き込めなかった入隊志願の内容だった。

雪のかたまりで教えた道理

新しい師団の誕生によって朝鮮人民革命軍の主力部隊が一層強化された後、金日成主席は、反日民族統一戦線運動と党創立のための組織的・思想的準備をより幅広く、深く展開していった。

一つの常設的な統一戦線組織を結成し、その傘下に広範

な反日愛国勢力をしっかり結集するのは、それ以上引き延ばすことのできないさし迫った課題であった。

ある日、行軍の休息時間だった。

祖国光復会創立の準備を進めていた主席は、「パイプじいさん」と民族統一戦線体の問題について意見を交わした。

フランス、スペイン、中国などでは、共産党、社会党、国民党などの政党と労働運動団体があったので、各政党や団体が連合して人民戦線を結成することができたが、わが国では事実上いかなる政党も合法的団体も皆無の状態だから、統一戦線体の組織は不可能ではなかろうか。

これが「パイプじいさん」の見解だった。

主席は、彼に雪のかたまりを二つ渡し、それを一つにしてみるようにと言った。

そして腰を屈め、小さな雪のかたまりをつくって雪の上に転がし、李東伯が合わせたものよりもっと大きなかたまりをつくった。

「さあ、見てごらんなさい。先生は二つの政党を連合して一つのかたまりをつくり、私は小さな求心力を利用してそれより大きなかたまりをつくりました。これでも、政党がなければ統一戦線体の組織は不可能だといえるでしょうか」

李東伯は、主席がつくった雪のかたまりをじっと見つめながらつぶやいた。

「じつに妙を得ています。けれども雪のかたまりは雪のかたまりで、政党は政党じゃありませんか」

主席は笑顔で答えた。

「ところが、われわれが体験する自然現象の中には、社会現象と理屈の上で一致する事柄が少なくないのです」

主席は、新しい世代の青年共産主義者が各階層の反日愛国勢力を結束する活動で積んだ経験を話しながら、次のよ

東崗会議

南湖頭会議で示された戦略的方針をさらに具体化し、祖国光復会の創立を全世界に宣布した朝鮮人民革命軍の軍・政幹部会議。

金日成主席の指導の下に1936年5月1日から15日まで、撫松県の東崗で行われた会議には、朝鮮人民革命軍の軍・政幹部が参加した。

主席は会議で行った歴史的な報告『反日民族統一戦線運動をさらに拡大発展させ、全般的な朝鮮革命を新たな高揚に導こう』で、祖国光復会創立の意義と性格、祖国光復会綱領の基本的内容を明らかにし、祖国解放の旗印の下に全民族を一つの政治勢力として固く結束する課題を示した。

会議では、主席が作成した「祖国光復会10大綱領」「祖国光復会創立宣言」「祖国光復会規約」が発表された。

主席は5月5日、わが国における初の反日民族統一戦線体である祖国光復会の創立を全世界に宣布した。

うに続けた。

「……大衆があり、指導的中核さえあれば、統一戦線体をつくることは十分可能です。目的と志向の同一性を基準にして、10人であれ100人であれ結集すべきだというのが統一戦線に関する私の見解です。われわれはこういう立場に立って、早くから統一戦線運動を推進してきたのです」

こう言われてはじめて李東伯は、首筋を叩きながら笑った。

「やっぱりドグマが問題ですな」

司令部の丸木小屋での清水奉奠

天道教は、当時わが国固有の民族宗教で、その基本的思想と理念において愛国的かつ進歩的な宗教であった。

金日成主席は、人間の尊重と平等を主張する天道教の進歩的な天道教徒と手を取り合う可能性があると認め、1936年初冬、司令部密営で天道教咸鏡南道道正の朴寅鎮に会った。

「……この騒がしい時世に、愛国の節操をかたく守りとおしている道正のような方がおられることは、われわれにとってまことに大きな力となり、喜びとなります」

「それは過ぎたお言葉です。私はそのようなお言葉をいただける人間ではありません」

そして、日本帝国主義侵略者のデマに乗って、たとえ一時ではあっても人民革命軍を「匪賊団」と誤解したことを心から詫びた。

主席は、団結して戦えば勝利し、団結せずに四分五裂してしまえば、百戦百敗するということは歴史の教訓であると言い、良心的な天道教徒も抗日大戦に合流して祖国光復会の周りに団結することを呼びかけた。

朴道正と閑談を交わしていた主席は、夜9時が近づくと、伝令を連れて外に出て、早くほうろう引きの器に清水を一杯汲んでくるようにと言った。

主席は、怪訝な顔をする伝令に、天道教徒には夜9時になると清水を奉奠する掟があると静かに言い聞かせた。

真鍮の器に清水を供えて拝むことを清水奉奠というが、これは天道教界では一日たりともおろそかにできない掟となっていた。清水は天地の根本を象徴し、そこには天地の恩徳を忘れまいとする教徒の誓いがこめられている。天道教の始祖——崔済愚がさらし首にされる最期の瞬間にも清水を供えて拝んだため、天道教徒は始祖の霊血を象徴する清水奉奠を伝統的に法化、慣習化してきたのである。

主席は部屋に入り、清水を奉奠する時間だと朴道正に言った。

「聖地の水ですが、真鍮の器の代わりにほうろう引き

の器についできたことをお許しください。道正、真鍮の器でないととがめずにどうぞ拝礼してください」

いたく感動した彼は、こう言った。

「天道教を崇拝しない将軍の軍営に来てまで、どうして清水奉奠ができるでしょうか？」

「東学党の乱の時、東学徒たちは戦場でも毎日清水を供えて呪文を唱えたというのに、道正が数十年の間守ってきた掟を密営に来たからといって破ってはならないでしょう。どうぞ安心して呪文を唱えてください」

彼はかたくなに辞退した。

主席は、「祖国光復会10大綱領」にも人倫的平等と信教の自由を保障することが明示されているのに、無神論者の前だからといって信仰心の人並はずれて強い道正が、平素の掟をただの一度でもおかすことになれば、かえって自分の方がすまないではないかと重ねて清水奉奠を勧めた。

やがて司令部の丸木小屋では、天道教徒の清水奉奠が行われた。

朴寅鎮道正は、わが国の祖宗が飲んでいた水で清水奉奠をしたのですから、今晩のことは一生忘れませんと言い、感無量の気持ちを隠せなかった。

地主のために設けた誕生祝い

1936年8月末のこと。

工作に出かけていた小部隊が深夜、親日地主だといって70過ぎに見える老人以下数名の人を連れてきた。

その老人がほかならぬ地主金鼎富であった。

金鼎富は、独立軍が長白地方で気勢を上げていた時、軍備団の南部担当部長として活動しながら、財産をはたいて独立軍に布地や食糧をはじめ各種の給養物資を調達した。また、地陽渓の谷間に漢学書堂を建てたし、その後、それを4年制小学校にかえ、後にはそれを150名以上の生徒を擁する6年制私立学校に切り換えたばかりか、学校の運営費と教師の給料を自分でまかない、自主独立と愛国愛族の思想を植えつける民族教育を実施するようにした。

彼は、小作人が小作料を自発的に納め、借りた米も利子を付けずに返済するようにした。

金鼎富がこのような善徳の持ち主だったので、地陽渓の住民は口をそろえて、「うちのおじいさま」「うちの部長さま」「うちの校主さま」とたたえ、彼の家の前には頌徳碑まで建てた。

主席は金鼎富に会い、次のように謝罪の言葉を言った。

「こんなうっとうしい真夜中にご足労をかけて申し訳ありません。不馴れな土地を歩きまわっているので、時にはこんな過ちを犯すこともあるのです。部下の無礼な振舞いをどうかお許しください」

「では、この部隊はなんの部隊じゃろう？　身なりを見ると胡狄でもなく、往年の独立軍の服装でもないし……」

金鼎富は主席に好奇の目を向けた。

「私たちは、朝鮮の独立のためにたたかう朝鮮人民革命軍です」

「人民革命軍ですって？　この前、撫松で日本軍をひどい目にあわせた、あの金日成将軍の部隊だというのかね」

金鼎富は、将軍をお見それして申し訳ないと許しを乞うた。

主席は、私の部下が深いわけも知らず、先生を引っ立ててきましたが、私は彼らに、金先生は親日地主でも反動地主でもなく、愛国地主だと話してやりました、私が地陽渓の村民のように先生の頌徳碑を建てることはできないまでも、愛国地主を親日地主とみなす不届きなことはいたしません、先生は独立運動のため心身共にささげてこられたご自身の過去を誇りとすべきだと思います、と言った。

「金将軍に愛国地主と言われては、この身が今ここで土

くれになっても心残りはありません」
　翌日、主席が老人に家に帰ることを勧誘すると、彼は国の独立に貢献する絶好の機会を奪わないでほしいと懇願し、その年の正月も密営で過ごした。
　そうしたある日。
　遊撃隊の密営に前例のないご馳走が用意された。
　主席が杯になみなみと酒を注いで老人に勧めた。
「金先生、この寒い冬に山中で誕生日を過ごさせて申し訳ありません。ほんの気持ちだけですが、たくさん召し上がってください」
「遊撃隊員がトウモロコシがゆをすすりながら国を取り戻そうと苦労しているのを見ると、一日三食の温かいご飯が喉を通りません。まして、この山中で私のような者の誕生日まで祝ってくれるとは、将軍のご恩は死んでも忘れませぬ」
「なにとぞ国の独立がなるまで、お達者でいてください」
　金鼎富は、私はこれまで共産主義者をあまりよく思っていませんでしたが、金将軍の共産主義は同じ地主でも親日と排日に分けて親日だけを討つのだから、そういう共産主義を誰が悪いと言いましょうか、私の寿命は知れたものですが、たとえ死んでも人民革命軍を助けて死ぬつもりです、と自分の心中を打ち明けた。

　それから金鼎富は、地主や資本家にとって生命ともいえる蓄財を断念し、その蓄財の元手となる財産を人民革命軍の援護に惜しみなく差し出した。

返した牛

　金日成主席の率いる主力部隊が長白県十九道溝の地陽渓に一時留まっていた1936年秋のある日。
　乾葉を拾いに出かけた二人の隊員が、1頭の牡牛を引いて帰ってきた。
　あちこち刈り入れの終わった田畑を歩き回りながら落ち穂拾いをしていた彼らは薬水洞の農民たちに出くわした。その農民たちは、遊撃隊が乾葉汁で飢えをしのいでいるということを知って牛をよこしたのだった。
　彼らが受け取ろうとしないと、農民たちは、薬水洞人民の誠意だからどうか受け取ってくれと、無理やりに牛の手綱を握らせた。
　この時、報告を受けた主席が牛のところへやってきた。
　主席は、ぶくぶく太った牛の背中や念入りにつくった鼻輪、おもがいに飾られている鈴や硬貨などをいちいちなでさすってみた。

しばらくの間その全てを注意深く見ていた主席は、集まった遊撃隊員に言った。

「牛を飼い主に返そう」

そのお言葉に牛を引いてきた隊員たちは唖然とした。幾日も空き腹に耐えてきた彼らにとって、それはまったく意外な命令だったのである。

——私がなぜ牛を飼い主に返そうというのか。それはこの牛が農民の大事な財産であるからだ。飼い主がどんなに牛を大事にしていたかを見たまえ！　あの鈴はおそらく飼い主の家に代々大事に受け継がれてきたものに違いない。硬貨はたぶん、その家のおばあさんが嫁いでくる時巾着の紐につけてきて一生大切にしていたものだろう。朝鮮の母親たちはそういうふうにして、牛に対する愛情を表わすのだ。……

呵責を受けている隊員たちの顔を見つめていた主席は、話を続けた。

……牛を返さねばならない今一つの理由は、薬水洞農民の営農がこの牛に多くかかっているからだ。われわれがそういうことを考慮せず、人民の誠意だからと牛をつぶしてしまったら、どうなるだろうか。飼い主とこの牛に頼っていた隣近所の農民たちは、明日から牛の代わりに仕事をしなければならなくなるだろう。……君たちもほとんどが貧しい農民の息子なのだから、汗水たらして苦

労する父母のことを考えてみたまえ。

「司令官同志！　私たちが司令官同志の意に背きました。人民を愛しろという対民衆規律に違反しました。……私たちを処罰してください」

こうして牛は飼い主に返されるようになった。

こま切り戦術にかかった靖安軍

1937年2月中旬のこと。

金日成主席は、部隊が腰房子付近の村に入ると、宿営命令を下し、桃泉里へ偵察班を送った。

偵察班は、その日の夕方に靖安軍の一部隊が桃泉里に入るという情報を手に入れた。

腰房子から桃泉里までの距離は12キロ程度で、桃泉里へ行くには、白樺やシラカシ、背丈を越すアシやカヤなどがからみあって延々と続く細道を通り抜けなければならなかった。

主席は、まず小部隊誘引戦で敵を疲労困憊させた後、大部隊による伏兵戦で徹底的に掃滅する決心をした。

主席は、2個小隊の人数で誘引班を組織して台地の上り坂の中腹に配置し、主力部隊の中核である第7、8連隊は引き続き前進するよう命令した。

誘引班は、桃泉里方向の大道の周辺に隠蔽し、敵の行軍縦隊が現れるとその先頭隊列に一斉射撃を加えた。

そしてすばやく身をひるがえし、伏兵隊の隠れているいばらの台地へ移動した。その意図を知るよしもない敵軍は、やみくもにそのあとを追った。

いばらに悩まされて、敵の隊伍はおのずと切れ切れになった。

そのずた切れの隊伍に伏兵隊が猛射を浴びせた。

数百にのぼる兵力が主席のこま切り戦術にかかって惨敗を喫した。

日が暮れかかるころ、敵は多くの死傷者を戦場に捨てて桃泉里へ逃げ去った。

敵は真夜中近くになってようやく村を発った。それは、朝鮮人民革命軍の部隊が桃泉里前の道路の左右に伏兵陣をはり、半時間ほど待っていた時であった。

一日中空腹を抱えて人民革命軍の戦術に乗っかってくたびれた敵は、夕食を食べ過ぎたせいか眠気がもよおされてへなへなと歩いていた。

主席は、敵が待ち伏せ圏内に完全に入った時、射撃命令を下した。

この伏兵戦で朝鮮人民革命軍は、靖安軍部隊を完膚なきまでに打ちのめしたのである。

5. 試練の丘

小湯河での一行千里の戦術

1937年春、金日成主席の率いる主力部隊は撫松遠征の途についた。

楊木頂子を発って東崗に向かって行軍していた主力部隊は、小湯河付近で敵に包囲されるようになった。

敵は数千名の大兵力を動員して幾重にも取り囲んでいた。それこそ水も漏らさぬ包囲網だった。夜には「討伐」隊が焚くかがり火によってあっちこっちに火の海が広げられた。

「討伐」司令官は物々しい記者団まで投入し、本部隊が金日成共産軍と遭遇したが、金日成司令官は30歳未満であり、東辺道第一と目される最大勢力だが、今は「袋のネズミ」だと豪語した。

「司令官同志、抜け道はなさそうです。決戦の準備をすべきではないでしょうか」

悲壮な決心を抱いた第7連隊長が、主席に進言した。

主席は、大小のかがり火が一面にゆらめく谷間を見おろしながら、包囲網を突破する妙策を考えた。

主席は即座に、住民地区へ出て大道路ぞいに東崗方面へ

行軍せよという命令を下した。

主席は決戦を覚悟した指揮官たちに言った。

「……敵はここに数千の兵力を集結した。……したがって、この近くの村や大道路はがら空きになっているはずだ。敵は今密林に注意を集中している。まさかわれわれが大道路を通過して脱出するとは夢想だにしていないだろう。ここに敵のすきがある。われわれはこの空間を利用して東崗密営へ迅速に移動するのだ……」

予想したとおり、大道路とその周辺村にはまったく人影がなかった。

隊伍は意気揚々として軌道の上を疾走する急行列車のごとく幾つもの村をすらすらと通過し、東崗の樹林の中を行軍した。

撫松遠征

1937年3月、金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍主力部隊の撫松遠征が行われた。

撫松遠征の目的の一つは、敵に長白から移動する朝鮮人民革命軍を追跡させて国境防備を弱めることにあり、いま一つは、遠征を通して新入隊員を新たな情勢の要請と朝鮮人民革命軍の使命に即して政治的、軍事的、道徳的にしっかり教育し、訓練させることにあった。

頭道嶺に引き返した訳

1937年5月初め、東崗密営で一カ月間の集中的な軍・政訓練を済ませた朝鮮人民革命軍の主力部隊は、金日成主席に率いられて祖国進軍の途についた。

「一刻も早く祖国に行こう！」

みながうれしい気持ちで行軍を急いでいた。

ところが、いくらか行軍していた隊員たちは、行軍方向が祖国への道ではないことに気付いた。部隊が昨年の冬に熾烈な戦闘をしながら通過したところへ戻っているのであった。

（司令官同志がなぜ計画を変更したのであろうか。……急がねばならない祖国進軍なのに……）

隊員たちはこのような考えをしながら行軍を続けた。

3日目に隊伍は頭道嶺辺りにたどり着いた。

主席は、行軍隊伍を止め、ある隊員に尋ねた。

「崔金山を臨時で葬ったところがこの辺りだね」

その言葉に隊員たちは胸が熱くなった。

主席は、犠牲になった金山を忘れられなくてここへ再び戻ってきたのである。

司令部伝令の崔金山が戦死したのは、1937年3月の撫松遠征の時だった。

当時頭道嶺で宿営していた部隊は敵の急襲を受けた。主席がいちばん後衛で撤収することを見つけた崔金山は、危機一髪の瞬間に一身が盾となって主席を決死の覚悟で護衛した。彼の軍服は鮮血に染まっていた。

頭道嶺の地面はかたく凍りついて、斧や銃剣でも掘ることができなかった。それで、仕方なく金山の遺体に雪をかぶせて葬ったのである。

主席は、新しい軍服を崔金山に着せ、日当たりのよいところに土葬し、墓前にはツツジを何本か移植するようにした。

花つぼみが膨らんでいるツツジに囲まれている墓を見つめながら、主席は戦友と心の中の対話を交わした。

（金山！ 安らかに眠ってくれ。われわれは再び白頭山に向かう。今年の夏にはおまえが願っていたように、部隊を率いて必ず祖国へ進軍する。祖国に行けば、おまえの仇を幾百倍、幾千倍にして討ってやる）

金日成主席は、隊伍に祖国への行軍を命令した。

作男の縁談

撫松遠征後、人民革命軍部隊が長白地方に戻って祖国進軍の準備を整えていた1937年5月下旬。

農家が数戸しかない吉城村に滞在していた金日成主席は、金月容という作男と知り合いになった。

小さい時から下男暮らしをしたので、娘をやろうという者がなく30過ぎまでも嫁をもらえずにいた。

熊手のようにごつごつしている手、弓のように曲がった腰、ぼろぼろの衣服……

主席は村を発つ時、主人の張老人にこう頼んだ。

「ご老人、一つ厄介なお願いをしたいと思います。私は昨夜、金月容という人のことを思って眠れませんでした。村のお年寄りたちと相談して、よいお嫁さんを見つけ、式も挙げてやっていただけないでしょうか」

「将軍に、そんなご心配までかけて申しわけありません。私らが相談してきっとそうしますから、どうかご安心ください」

村の年寄りたちは約束を守った。彼らの取り持ちで金月容は立派な嫁をもらい一家を構えた。

この知らせに接した主席は、戦利品の中から最上の織物と

食品類を選んで吉城村に送るよう、給養担当官に指示した。

「将軍、その結婚式にどうしても贈り物をしなければならないのですか」

給養担当官の思いがけない質問だった。

「もちろんだ。気に入らないのか？」

「……実は、贈り物をする気になれません。一生に一度の婚礼を一膳の飯で挙げただけで、戦いの途上で倒れた同志たちがたくさんいたではありませんか」

主席は、彼の気持ちがよく分かった。

「そういうことを考えると、私も胸が痛む。……われわれが一膳の飯で式を挙げるからといって、人民もそうすべきだという法はないだろう。……民族の再生を目指して銃をとった朝鮮の若者たちが、金月容一人の結婚式くらいこれ見よがしに祝ってやれないというのか」

給養担当官は、その日のうちに贈り物をととのえ、吉城村へ向かった。

「将軍、西間島の青年の結婚式の贈り物は、みなわれわれが引き受けることにしましょう」

帰ってきた給養担当官の言葉だった。

その後、朝鮮人民革命軍が作男の縁談を取り持ち、贈り物までしたといううわさは西間島一帯に広まり、人民革命軍への大衆の信頼と期待はいちだんと大きくなった。

普天堡を討った理由

1937年5月のある日、金日成主席は、敵が茂山地区に進出した第4師を「討伐」するために大々的な包囲陣を張っているという報告を受けた。

早急に対策を講じなければ、その部隊は危険にさらされる恐れがあった。

主席は、朝鮮人民革命軍主力部隊の軍・政幹部を呼び、われわれは必ず国内へ進攻しなければならない、この作戦の変更や取り消しなどはありえない、また、われわれは至急崔賢部隊を救出しなければならない、国内進攻を重視するからといって、革命の同志を死地に置き去りにすることはできない、だとすれば活路はどこにあるのか、それは国内のある地点を討って二つの目的を同時に達成することだ、と言った。

「司令官同志、その地点とはどの地方ですか」

主席が地図で普天堡を指すと、指揮官はみな目を丸くした。

「司令官同志、その小さな村落を襲撃して、私たちの目的を達成できるということですか」

どうしても理解にならなかったのか、指揮官中の誰かが

このように聞いた。

主席は、そうした指揮官たちを見回して、説明を続けた。

——普天堡を討てば、ペゲ(枕)峰方面に集中している敵は、われわれの主力部隊と崔賢部隊に逆包囲されるという恐れを感じて包囲追撃戦を放棄し、進出した界線から撤収するはずだ。……また普天堡を討てば、恵山を討つのに劣らず国内に強烈な衝撃を与え、遊撃隊の国内進攻の目的も十分に達成できる。……

会議では、金日成主席の打ち出した作戦方案をそのまま実行することを決定した。

普天堡の炎

1937年6月4日、坤長徳を下る祖国進軍隊伍が普天堡市街地の周辺にある佳林川のほとりのドロノキの下に到着したのは、夜9時過ぎだった。

静かな市内の家々から、かすかな明かりが流れてきた。

夜10時、時計を見ていた主席が、ゆっくり拳銃を取り出して高くかざした。

「ドン！」

戦闘開始を知らせる銃声だった。

その銃声を合図にして指揮所から遠くないところから機関銃の点発射撃音が鳴り、ついで歩銃や拳銃の射撃音が入り混じって市街全体を揺さぶりはじめた。

四方からけたたましく聞こえていた射撃音は、しばらく経つと次第に低くなるかと思うと、すぐ静かになった。たびたび市街のあちこちで一、二発の銃声が聞こえたが、それも止まり、その代わりに赤々と炎が燃え上がりはじめた。

最初は銃声を聞いて何事かと怖気付いていた人たちが、銃声が止まり、敵の統治機関で火の手が激しく燃え上がると、我先に家々から飛び出して面事務所の前に集まった。

アジテーターの撒いたビラや檄文を読んだ人民は、両手を上げて万歳を叫んだ。

「金日成将軍が来られた！」

「金日成将軍万歳！」

主席は、歓呼する群衆に手を上げて応えながら、祖国の人民と温かく対面した。

主席は、集まった群衆を見回し、手を高く上げて演説した。

「みなさん！　あの火柱を見てください。あの激しく燃え上がる炎は敵の最後を示唆しています。あの炎は、朝鮮民族は死なずに生きており、強盗日本帝国主義者と戦って勝利することができるということを全世界に示しています。……」

主席は、すべての愛国勢力が固く団結して日本帝国主義を打倒し、祖国解放の偉業を実現するための聖戦にこぞって立ち上がろうと呼びかけた。

人民の叫ぶ万歳の声と共に、普天堡の炎は夜空を赤く染めて一層激しく燃え上がった。

天下無敵

普天堡戦闘が勝利のうちに終わった翌日の未明、金日成主席は部隊を引率して口隅水山に登った。

間違いなく国境一帯の守備隊に非常動員令が下ったはずであり、戦いが起こるならなぜかその戦場は口隅水山になりそうな予感がしたのである。

口隅水山は傾斜が60度もある岩山だった。

主席は隊伍が頂上に着くと、全員で塹壕を掘り、要所要所に石を集めるようにした。

空が明けそめてくる頃、歩哨線から敵が現れたという信号があった。

主席は、敵が陣地の近くまで来た時、射撃の号令をかけた。高地では小銃と機関銃がいっせいに火をふいた。

主席も小銃で敵兵を狙い撃ちにした。

遊撃隊の射撃が激しくなると、敵は岩のすき間に隠れて対応射撃をした。

主席の命令によって、隊員たちは石を転がしはじめた。辺りはまたたく間に、石なだれや機関銃弾に打ちのめされた敵の死体でいっぱいになった。

この日の戦闘で、生きて逃げた敵はわずか数人しかならなかった。

結局、普天堡で大打撃を受けた敵が、今回は口隅水山で今一度ひどい目にあわされたのである。

朝鮮人民革命軍に従って普天堡から荷を運んできた人たちは、口隅水山戦闘を初めから終わりまで見て、人民革命軍の威力に大いに感嘆した。

「日本軍は自分らを『天下無敵』だと豪語しているが、実際に天下無敵なのは日本軍ではなく朝鮮人民革命軍だったな」

「ごもっともだよ。金日成将軍が率いるわが軍が天下無敵だもん」

地陽渓台地での軍民交歓集会

1937年6月、長白県十九道溝地陽渓では、遊撃隊員たちの感激的な出会いがあった。

金日成主席は、茂山地区での敵の包囲を無事抜け出して帰った崔賢部隊と感激的な再会をした。

部隊が地陽渓に到着した日、十九道溝の区長が主席のところを訪ねてきた。

「将軍、普天堡と口隅水山での戦勝を祝って、村民が粗末なものだが食べ物を用意しています。遊撃隊と人民が一緒に食事をしてはいかがでしょうか」

だが、主席は彼の要請を容易には聞き入れることができなかった。

それで食事の準備をしないでほしいと言った。

区長はあくまでも聞き入れようとしなかった。

「これは私一個人のお願いではありません。十九道溝の民心です。これだけはどうか受けてください。私が将軍から断られて帰れば、村の女性たちまで私を大馬鹿者だといって石を投げつけないともかぎりません。それはまあ私が我慢するとしても、全村が落胆するのは目に見えています。

これをどうすればいいのですか」

主席は、こうなったからには、民家に分かれて食事をするより軍民がひとところに集まり、心ゆくまで楽しんではどうだろうか、軍民交歓集会と名づけて、その日は地陽渓の台地で白昼これ見よがしに盛大な祝賀集会を催そう、軍民が一つにとけあって互いに励まし、情誼を分かちあえるようにしよう、天地をどよもすほどの娯楽会や運動会も開いて、みんながいっさいの憂さを振り払って楽しもう、と言った。

こうして6月中旬、地陽渓の台地では軍民交歓集会が開かれた。

遊撃隊と人民が別々に席を定めず、互いに入り交じって座をとった。

主席は、人民革命軍を代表して、『軍民が一致団結して祖国解放偉業を早めよう』という歴史的な演説を行った。

主席の演説についで、朝鮮人民革命軍が国内進攻で勝ち取った大きな勝利を祝う革命組織代表の祝賀演説があった。

森の中には歌声が響き、踊りの輪が繰り広げられた。地陽渓台地での軍民交歓集会は、遊撃隊が人民に愛され、人民は遊撃隊に守られながら険しい歴史のいばらを踏み分けてきた抗日革命の縮図であった。

間三峰の「カボチャの豊作」

金日成主席は、遊撃隊員と人民の意気衝天した士気を一層高め、日本の侵略者に朝鮮人民革命軍の気概を今一度誇示するために、長白県八盤道の「集団部落」を襲撃することにした。

八盤道には、300余名の満州国軍「討伐隊」が駐屯していた。主力部隊が間三峰付近に至ったのは、1937年6月末頃だった。

主席は地方組織から、日本軍大部隊が恵山方面に出動し、新坡方面から鴨緑江を渡河したという情報を受けた。

主席は、八盤道へ向かっていた行軍をいったん止めさせ、戦場を選ぶことにした。

戦場としては間三峰がうってつけだった。

翌朝、敵が間三峰に押し寄せてきた。早朝からこぬか雨が降り、霧が立ちこめていた。崔賢部隊が占めた山頂の監視所でまず合図の銃声が鳴った。

崔賢は歩哨隊が敵の包囲に陥る恐れがあるとみて、1個中隊を率いて前方へ突っ込んだ。敵はたちまち彼の中隊を包囲してしまった。

主席は李東学中隊長に、警護中隊を率いて崔賢中隊を早く救出するよう命じた。

日本軍は満州国軍を弾除けにして猛攻を加えてきたが、崔賢部隊と李東学中隊が内と外から猛火を浴びせて挟撃したので事態は逆転した。人民革命軍は、敵を何度も峡谷に追い込んで終日痛撃を加えた。

しかし、日本軍は同僚の屍を踏み越えながら、次から次へと波状攻撃をかけてきた。

遊撃隊が10余挺の機関銃を据えて弾幕を張りめぐらしたが、敵はそれにもひるまず群れをなして攻めよせた。

こんな攻撃が一日中続いた。そのため、遊撃隊もかなり苦戦せざるを得なかった。

一部の地点では敵がわが方の陣地に突入したので、白兵戦を繰り広げなければならなかった。その上、雨が降りつづいて戦場は凄惨をきわめた。

朝鮮人民革命軍の方からは力強い歌声が響いた。

女性隊員たちが歌った『アリラン』の歌が全隊に広がった。

この歌声は、遊撃隊員の戦闘士気をこの上なく高めた一方、敵を威圧し、恐怖におののかせた。

敵はおびただしい死傷者を出しながらも、豪雨をついて日が暮れるまで攻撃を中断しなかった。

このような時主席は、八盤道方面の偵察任務を遂行して

帰隊する小部隊と食糧工作班に伝令を送って、敵の背後をつかせた。

敵は、前面と背後から挟撃される危険にさらされた上に日も暮れたので、わずか200名ほど残った敗残兵を集めて逃走した。

間三峰戦闘は、朝鮮人民革命軍の輝かしい勝利に終わった。

戦闘があった翌日から、敵は恵山、新坡そして間三峰付近の村から担架や牛車、馬車、トラックなどを徴発して死体を運搬した。

死傷者があまりにも多かったので、彼らは死人の首を切って麻袋や木箱に入れ、牛車や馬車でトラックが待機しているところまで運び出した。

残された死体は火葬にされたが、その煙と臭いのために間三峰地区の農民は、何日もの間息をするのも苦しいくらいだった。

首の運搬にあたっていた日本軍兵士に、ある農民がそしらぬ顔をして聞いた。

「この車に積んでいるのはなんですか？」

「カボチャ」

「カボチャの豊作ですね。汁の実にすればおいしいから、たんとめしあがれ」

銃をとった少年たち

1937年夏、金日成主席が朝鮮人民革命軍主力部隊を率いて白頭山地区に進出して次々とあげた勝ちどきは、人々の間に広がり、彼らの胸を揺さぶった。

その知らせを伝え聞いた青年の間では入隊熱がものすごく高まったし、参軍運動には20代、30代の青年ばかりでなく、10代の少年も参加した。

ある日、人民革命軍入隊志願者との活動状況について報告していた第7連隊政治委員が、主席にこのように言った。

「司令官同志、これ大変なことになりました。小銃の丈にも及ばない小さな子どもたちが20名ほどやってきて、入隊させてくれとせがんでいますが、どうしたらよいか分かりません。もう少し大きくなってから来るようにと、いくら言って聞かせても駄目なのです。しまいには、将軍に会わせてくれないと帰るまいとまで言い出すしまつです」

少年たちのところへ行った主席は、彼らの頭も撫で、肩も叩きながら、挨拶をことごとく受けた後、彼らの生い立ちについて尋ねた。

彼らはいずれも、敵の「討伐」で親兄弟や近い親類が虐

殺された悲しみを抱き、あらゆる苦労と不幸をなめてきた子たちであった。

「……おまえたちが親兄弟の仇を討とうと、銃をとる決心をしたのは感心なことだ。それは愛国心のあらわれだ。だが、おまえたちはまだ小さいから革命軍に入隊するのはむずかしいと思う。遊撃隊の兄さんや姉さんたちがどんなに苦労しているか、おまえたちにはとてもわからないだろう。革命軍は真冬にも山の中で雪を寝床にして寝なければならない。何日も雨にうたれながら行軍する時もある。食べる物がなくなったら草の根や木の皮を煮て食べたり、水を飲んで我慢するのが革命軍の生活だ。私の見るところでは、おまえたちはそんな苦労を辛抱できそうにない。家に帰ってもう少し大きくなってから銃をとるのがよいと思うが、どうだろうか……」

すると彼らは、席からバネのように立ち上がった。

「将軍、どんな苦労も大丈夫です。大人たちが雪の上で寝るんだったら私たちも雪の上で寝ることができるし、大人たちが戦う時は私たちも戦うことができます。どうか遊撃隊に入隊させてください」

翌日、少年たちが提出した宣誓書をいちいち読んだ主席は、中隊政治指導員以上の指揮官を司令部に集めて、馬鞍山出身の児童団員と西間島から来た子どもたちで少年中隊

を編制すると正式に告げた。

こうして、歴史に類例のない少年中隊という武装隊伍が生まれるようになった。

新入隊員がもらった手紙

朝鮮人民革命軍の主力部隊は、1937年11月下旬からおよそ4カ月にわたって濛江県馬塘溝で集中的な冬期軍事・政治学習を行った。

学習が始まってから相当期日が流れたが、第7連隊には学習を怠りながら手を焼かせる新入隊員がいた。

彼は、戦友から熱心に学習するよう忠告されても耳を貸さず、どこから聞き込んだのか、洪範図将軍も自分のような無学だったが、独立軍の隊長を務めてりっぱに戦ったではないか、読み書きができなくては革命活動ができないなんてとんでもない話だ、と反ばくするありさまだった。

そのことを知った主席は、その新入隊員宛に手紙を書いて伝令に渡した。

そして誰もその手紙を読んでやらぬよう、前もって釘を刺しておいた。

手紙を受け取った彼はあわてた。

平隊員の自分が司令官の手紙を受け取ったのに、そこに何が書かれているのか分からなかったので、すわ一大事というわけであった。彼は同友を訪ねまわって手紙を読んでくれるよう哀願した。

しかし、残念なことに、誰一人その手紙を読んでくれなかった。彼はみなへの恨めしい気持ちもあったが、どうすることもできなかった。

彼はやむを得ず、手紙を持って司令部に行った。

主席の前で新入隊員は、顔を伏せてとぎれとぎれに言った。

「司令官同志、……誰も手紙を読んでくれないので、持ってきました」

主席は何も言わず、手紙を手にしてその内容を自ら読んだ。

そこには緊急指示が記されていたが、すでに指定の時間がだいぶ過ぎていた。

新入隊員はうなだれて脂汗を流した。

主席は、どうだ、無学のため司令官の命令も実行できなかった、君が敵地で工作中に私から手紙で何か命令を受けたと考えてみたまえ、そんな時どういうことになるだろうか、と言った。

主席は、革命家にとって学習は第一の任務である、いつどこでも一生懸命に学習しなければならない、と言い聞かせた。

一合のはったい粉

1938年冬から始まった苦難の行軍は、試練と困難が折重なった実に苦しい行軍だった。

ダニのようにくっついて離れない日本「討伐隊」の執拗な追撃と、オノオレカンバも凍って裂けるほどの酷寒も忍びがたいものだったが、それよりずっと耐えられない苦痛は飢えだった。腰まで埋まる密林の深い雪道をかき分けながら、毎日追ってくる敵との戦闘の中で行軍を続けていた。

苦難の行軍

1938年の12月初から翌年の3月末にかけての、濛江県南牌子から長白県北大頂子に至る朝鮮人民革命軍主力部隊の行軍を苦難の行軍という。

南牌子から北大頂子までは徒歩で5、6日で行ける距離であった。ところが、敵の絶え間ない追撃と包囲の中で行軍が進められたので、100日余りもかかってやっと目的地にたどり着くことができた。

苦難の行軍の内容を一言で要約すれば、厳酷な自然とのたたかい、ひどい食糧難や疲労とのたたかい、恐ろしい病魔とのたたかい、奸悪な敵とのたたかいが一つにからみあったものであった。

ある日、司令部の伝令は、自分の背のうの中に保管していた非常用はったい粉を取り出して金日成主席に差し出した。

しかし、主席はそれを若年の伝令に渡した。

それを受けた彼は、どうしたらいいのか分からず涙ぐんでいた。

主席は、自分の心配はしないで早く食べろと言いながら彼の頭を撫で、席を立った。

しかし彼は、はったい粉に少しも手を出さずに他の伝令に渡した。結局、その一合のはったい粉は再び背のうの中に入るようになった。

行軍は続いた。

伝令たちは、主席にどうしてもはったい粉をもてなそうと思って相談し、一合のはったい粉を適当に小分けして後の分は保管し、残りを主席に差し出した。

主席は、伝令たちに背のうをみな持ってくるようにと言い、彼らの背のうをいちいちのぞき込んだ。彼らは仕方なく、背のうの中にしまっておいたはったい粉を全部出さざるを得なかった。

主席は、新聞紙を広げてそこにはったい粉を集め、伝令たちに車座になるようにと言った。

そして紙さじではったい粉を均等に分け与えながら、これを一斗だと思って食べれば腹がふくれるだろうと言った。

彼らはそれ以上遠慮できず、水に割った。ところが、のどが詰まって飲みくだすことができなかった。

1合という量的大きさをもってはとうていはかれない、主席の温かい情愛が力となり、信念となって、隊員たちは歴史に類例のない苦難の行軍を勝利のうちに終えることができた。

富厚水の台地での絶妙な戦術

金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍が長白県の富厚水の台地に至った1939年2月上旬のある日。

執拗に追撃する敵の大部隊を振り切る方途を模索していた主席は、部隊が富厚水の台地の周りを回るようにした。

部隊が台地を二回りくらいすると、雪に覆われた樹林が暮れはじめた。遊撃隊と敵との距離もはるかに遠くなった。この時、他の「討伐隊」が現れてちょうど遊撃隊と遊撃隊を追撃していた敵の間に挟まる格好になった。

その台地を一周するには一日かかるので、連係のない二集団の敵が二重に追撃するという奇妙な出来事が起こったのである。

すぐ敵情を把握した主席は、隊員たちに台地の周りを回らせながら、めいめいに橇のながえほどの木を一本ずつ

切って担がせた。

主席は、部隊が台地を回って出発点に戻ると、担いできた木を切り株と切り株の間に渡し、それを伝って横に抜けて密林の中へ500メートルほど入ってからその木をなくすようにした。そして、300メートル前方に歩哨を立てて隊員たちを休息させた。

しばらくして、追っていた「討伐隊」が革命軍を見つけずにそのまま通り過ぎてしまい、敵同士で互いの後尾に食らいついて台地を回っているという報告が歩哨所から入ってきた。

日が西に消えかかると、敵はもっと暗くなる前に「革命軍」を追いつこうとやっきになった。

そうするうちに、後ろの「討伐隊」が途中に挟まった味方を追いついたが、その時はすでに周りがすっかり暗くなった。

焦り果てた敵は、前の部隊に向かってやたらに射撃を始めた。後頭部を叩かれた前の敵は、これを革命軍の逆襲だと見込んで対応射撃をした。

夜通し富厚水の台地で遊撃隊の絶妙な戦術にかかって途方もない損失を被った敵は、革命軍は神出鬼没と昇天入地の妙策を用いるので、とうてい「撃滅」できないと悲鳴を上げた。

塩事件

1939年3月下旬、苦難の行軍の末期にあったことである。

当時、困難の中で一番忍びがたいのは食塩難だった。

塩を食べられなかった隊員は、顔がむくみ、酒に酔った人のように体の均衡を失ってふらついた。

主席は、ある新入隊員に塩を求めてくる任務を与え、助力者も一人付けた。

敵地に行った新入隊員は、山中で父に会った。

老人は、塩のために革命軍が戦もできないとはとんでもないことだ、なんとしてでも塩を求めてみる、と言った。

だが、塩を手に入れるのは口で言うほど簡単なことではなかった。

当時、満州国の官庁や警察機関では、商店で塩を制限量以上売ることを禁じていた。そして、随時商店での塩の販売状況をひそかに調査していた。

このような状況を知っていた老人は、一、二斤でも多く買って送ろうと思い、普段から親しくしていた隣の老人に頼んだし、またその老人は自分と親しい他の老人に頼んだ。

ところが、3人目の老人が、協和会の会員である自分の息

子が密偵だとはつゆ知らず、秘密をもらしてしまった。その息子は、父親から聞いた話をすぐさま上司に報告した。

この事実を知った関東軍特務機関では、警察機関に命令を下して、西崗一帯の商店の塩を全部買い占めさせ、その代わり長春から飛行機で急送させた塩を商店に配達させた。その塩には毒が入れてあったが、その毒入りの塩を食べるとすぐに死ぬのではなく、徐々に頭が痛み、足の力が抜け、気力を失うものだった。

二人の老人は、塩を担いで塩工作班と共に革命軍の宿営地に向かった。

しかし、抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）女史によって塩に毒が入っていることが判明し、即時各部隊に分配した塩を回収しろという主席の命令が伝わった。

だが、一部の隊員はもう毒入りの塩を食べていた。

この日部隊は、遊撃隊員が毒入りの塩を食べて倒れたと見越して襲い掛かる敵と苛烈な戦闘を交えざるを得なかった。

この戦いは2日間も続いた。

敵の攻撃を完全に撃退した部隊は、安全な森林地帯に撤収した。

毒薬に中毒していた各連隊の隊員たちもだんだん元気を回復した。

部隊の一部の指揮官と隊員は、塩を求めてきた新入隊員

と彼の父が何らかの奸策をめぐらしたと断定しながら彼らを冷遇したし、ある隊員は塩を持ってきた老人たちを直ちに処刑しようと言い出した。

主席は、そのような隊員たちを厳しく叱責し、荷物を担いできた老人たちに会って塩の購入過程と彼らの生活経歴などを具体的に聞き取った後、老人たちには罪がないとして彼らの労をねぎらった。

そして、家に帰ったら敵がなんの仕打ちをするか分からないから、新入隊員の父は他の地方に移す方がいいと言い、家族をつれていく方法も教え、旅費まで与えた。

主席は、西間島の物情に明るいある指揮官に、彼らを家にではなく他の安全な土地へ連れていくようにと指示した。

その指揮官は主席の指示通りに、まず二人の老人に安全な隠れ家をあてがったのち、家族もそこへ移した。

また、塩事件のいきさつも探り出してきた。

実に塩事件は、朝鮮人民革命軍が国境一帯へ、祖国へ進出する苦難の行軍過程でなめた最も厳しい試練の中の一つだったし、朝鮮人民革命軍は銃弾や砲弾はもちろん、いかなる謀略や奸計をもってしても「掃滅」できない不敗の隊伍であることを敵に再びはっきりと認識させた事件でもあった。

6. 白頭山の東北部にて

再び祖国へ

金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍主力部隊は、冬中かつてない厳しい試練を克服して国境一帯へ進出し、1939年4月初め、ついに長白県北大頂子の辺りにたどり着いた。

主席は、北大頂子で会議を開き、再び祖国に進出するという方針を打ち出した。

1939年5月のある日の明け方、主席は隊伍に祖国への出発命令を下した。

先兵を立たせた行軍隊伍が相当険しい山の傾斜面を下りると、谷間が見えた。そこの早瀬なのか、せせらぎがゆかしく聞こえてきた。

森林から抜け出ると小さな堰が現れた。

「後ろへ伝えろ。音を立てずに速く河を渡ること！」

川岸に至ると、前方から指示が伝わってきた。

水上に1本の倒木が倒れていたが、まるで一本橋のように見えた。隊員たちは倒木を伝って河を渡った。一部の隊員は堰を、一部は飛び石を渡っていたが、ここが鴨緑江だと知っている人は別にいなかった。

主席は、幼いチビ隊員を背負って河を渡りながら、これ

がなんの河なのか知るのかと尋ねた。

知らないという答えに、これが鴨緑江だと言った。

チビ隊員は、自分を下ろしてくれとせがんだ。祖国の川水に身を浸してみたかったのである。

祖国の地を踏んだ隊員たちは、形容しがたい感激に包まれていた。

祖国進軍の隊伍は、日本軍が数百里国境線にいわゆる「鉄桶の防御陣」を張って、空飛ぶ鳥も突破できないと豪語していた国境を跡形もなく越えた。

川岸のあちこちに満開したツツジの花の香りが春風に運ばれてきた。

激情にかられた隊員たちは、両腕を大きく広げ、ツツジを抱きかかえて涙を流した。土を掴んで頬にこする隊員もいたし、草原の上に横になって転がる隊員もいた。

遊撃隊員たちは、祖国の地とうっそうたる森に向かって心から叫んだ。

「朝鮮よ！　われわれがあなたの懐に帰ってきた！」

甲茂警備道路の「開通式」

1939年、朝鮮人民革命軍の大部隊が茂山地区に進出する時のことである。隊伍がペゲ峰に到着した時に危急の状況が生じた。敵の大兵力が捜索作戦に駆り出され包囲網を狭めていた。国内進攻作戦を成功させるに、当分は激戦を避けて茂山地区の方に脱出しなければならなかった。そのためには、敵が展開されていないか、関心を向けていない隙を見つけるか、そのような空間をつくらなければならなかった。このような戦術的意図を貫徹するには、どうすればよいのか？

主席は、自分が考えていた案を示した。それは、敵が建設を終えて竣工検査を待っている甲茂警備道路を伝って白昼に大道行軍を断行し、一気に茂山地区へ進出しようというものであった。

指揮官たちはみな目を丸くした。

白昼に、それも普通の小道ではなく、敵がわれわれの「討伐」を目的に特別に建設した道路を大部隊で行軍するなんて？

そんな指揮官たちを見回しながら、主席は説明を続けた。

——われわれが甲茂警備道路を白昼に行軍するのが十

分可能であることは、この場に集まったみなさんの態度が証明している。みなさんは白昼に大道を行軍しようという私の意見を聞いて唖然とした。

敵も、朝鮮人民革命軍の大部隊が自分たちが特別に建設した警備道路を白昼に隊伍を組んで行軍するとは夢にも思わないだろう。まさにこの点に白昼大道行軍の確実な可能性がある。敵が不可能だと考えていることを大胆に強行するところに、この行軍の可能性を約束する戦術的裏付けがあるのだ。

主席の率いる隊伍は、ほうきできれいに掃いておいた甲茂警備道路を伝って茂山地区へ進出した。

敵は、遊撃隊が白昼に甲茂警備道路の「開通式」を行ったと慨嘆し、これは実に「未曽有の怪事」だと悲鳴を上げた。

遊撃隊を信頼する人民

金日成主席は、敵が必ず追撃してくるものと予見し、地形上有利な大紅丹が原で敵を掃滅することにした。

主席は、1939年5月下旬、第8連隊と警護中隊を率いて大紅丹が原に進出した。

そこで伏兵陣を張り、新開拓に進出した第7連隊が戻ってくるのを待っていた。

やがて新開拓の敵を討って撤収する第7連隊が大紅丹が原に現れた。第7連隊は鹵獲した物資を担いで前を行軍し、後ろには荷物を運んでいる労働者たちと数名の日本人がいた。

ところが、鉄かぶとをかぶった数百名の敵が第7連隊の後尾にぴったりついてきた。

主席は、先頭の第7連隊の隊員はそのまま伏兵陣を通過させたのち、隊列後尾の給養班の隊員と労働者に伏せるよう合図をしてから、射撃命令を下した。

遊撃隊の一斉射撃で敵はばたばたと倒れた。しかし、生き残った敵兵は必死になって抵抗した。

遊撃隊と敵の間に挟まった給養班の隊員と労働者は、激しく降りそそぐ弾丸のため、頭をもたげることもできないありさまだった。

その時、戦場では奇妙な光景が現出した。労働者たちが二つに分かれたが、朝鮮人は荷を担いだまま人民革命軍の陣地へ駆け込み、日本人は肩の荷を捨てて日本軍警の方に這っていくのであった。朝鮮人労働者で日本軍警の方へ行った者は一人もいなかった。

主席はそれを見て、民族の血は争えないものだということをいまさらのように痛感した。

その日、大紅丹で朝鮮人民革命軍と一戦を交えた敵はほとんど全滅した。

茂山地区進攻作戦においてクライマックスを成した大紅丹戦闘のうわさは、またたく間に全国至るところに広がった。

この戦闘後、わが人民は敵のデマに絶対に乗らず、金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍を一層信頼するようになった。

烏口江戦闘

1939年春、白頭山の東北部で軍事・政治活動を強力に繰り広げるという方針を打ち出した金日成主席が、敵に絶え間ない打撃を与えつつ百日坪付近に至った時のことである。

百日坪には、300余名の悪質な靖安軍が駐屯していた。

「討伐隊」の隊長は、金日成遊撃部隊一つ始末できずに敗戦を重ねるのは皇軍の恥だ、わしがその部隊を全滅させてこの恥をそそいでみせる、と豪語しながら「討伐」に出た悪質な者だった。

主席は、百日坪の靖安軍をせん滅する決心を下した。これは、敵の中でも最も悪質な百日坪の靖安軍からやっつけることによって、他の「討伐隊」を制圧する一方、人民に

勝利の信念をいちだんと強めさせるためだった。

主席は、待ち伏せの位置を百日坪からさほど遠くない葦原にした。その葦原の真ん中には烏口江が流れ、一方の岸に沿って車道が伸びていた。川と道の両側は樹林地帯なので、待ち伏せするのに有利だった。

敵が烏口江畔に姿を現したのは、朝霧が晴れはじめたころだった。

重武装した数百名の敵が数人の機関銃射手を先頭に、威勢よく行軍してきた。敵の全隊伍が人民革命軍の待ち伏せ圏内に入った時、主席が射撃命令を下した。

閑寂な烏口江畔に敵撃滅の銃声が響き、敵の悲鳴が谷間を揺るがした。最初の打撃に敵の大多数が掃滅されたし、残りは手を挙げて降参した。

戦闘は10分たらずのうちに朝鮮人民革命軍の勝利に終わった。

朝鮮人民革命軍主力部隊はこの戦闘でたくさんの敵を殺傷・捕虜にし、4挺の機関銃をはじめ多くの兵器と軍需物資を鹵獲した。「討伐隊」の隊長なるものは、軍刀のつかに手をかけたまま溝のそばに倒れた。

遊撃隊員は、彼の痛ましいざまを見て嘲笑した。

玉石洞でのサッカー試合

白頭山東北部の豆満江沿岸の敵を連続的に打撃して軍事的に制圧した金日成主席は、1939年6月中旬、和竜県玉石洞一帯を革命化の対象と定めて進出した。

主席は、遊撃隊員をして村の人々に、抗日遊撃隊の誇り高い戦闘ニュースや『祖国光復会10大綱領』の内容を分かりやすく解説し、革命偉業の正当性と必勝の信念を深く植え付けるようにした。

一方、そこで毎年楽しむ祝日の運動会を特に手抜かりなく準備するようにした。

主席は、12キロ四方の玉石洞の谷間に住む人はみな運動会に参加させ、隣村から来られそうな人もみな招くようにと指示した。

そして、ブランコや相撲、軍民交歓会や演芸公演と共に、サッカー試合まで行うようにした。

豆満江沿岸の村々は、解放の日でも迎えたかのように賑わった。青壮年たちは、今度の祝日には思う存分楽しもうと、ブランコをしつらえたり相撲場をつくったりゴールの柱を立てたりした。

敵が和竜一帯におびただしい「討伐」兵力を集中している時に、そのど真ん中で余裕綽々として祝日を祝い、サッカー

の試合までするということは想像すらできないことだった。

数ヘクタールもある玉石洞の広い台地で行われた朝鮮人民革命軍と村の青年とのサッカー試合は、なかなかの見物であった。双方の選手たちがボールを蹴りそこなって代わる代わる草原に転がるので、場内では爆笑が絶えなかった。

老人たちは、玉石洞に村ができて以来、今日のように村人たちが心置きなく笑いさざめくのを見るのは初めてだ、と涙をたたえて言った。

ブランコや相撲も盛況をきわめ、軍民交歓会や演芸公演もアンコールの連続で予定の時間をはるかに超過するありさまだった。

その日、玉石洞では数十名の青年が革命軍への入隊を志願した。

人民は集まりさえすれば、百日坪で「討伐隊」が全滅したことと玉石洞でのサッカー試合のことをよく話題にした。

中国人地主の劉通事

白頭山東北部に活動舞台を移した朝鮮人民革命軍が和竜県一帯で活動する際、義援金工作のために劉依賢という中国人地主を密営に連れてきたことがあった。彼は、朝鮮語がうまいから劉通事とも呼んだ。劉通事は和竜一帯の有名な富豪で

あった。彼は共産党を自分の宿敵だと公然と言っていた。

金日成主席は、劉通事との面談を自ら受け持って、たいへん印象に残る談話を交わした。

その時、劉通事はだしぬけにこんな質問をした。

「巷では今、金司令部隊を『共匪』と言っています。金司令が共産党だというのは本当ですか？」

「人民革命軍を『共匪』というのは日本人の言うことですが、私が共産主義者であることは事実です」

「それでは、今まで反共の側に立ってきた私を、金司令はどう思いますか？」

「通事が反共の側に立っていたことを、私は非常に残念に思っています。しかし、われわれは通事を懲罰する考えは毛頭ありません。それは、通事が共産主義者についてよく知らずに反共に走り、また反共に走りはしても中国を愛し、中華民族を愛してきたからです。反共に走っても亡国は望んでおらず、地主であっても国があっての中国の地主であることを望んでいるのが、まさに通事です。私はこの点を非常に重視しています」

「金司令、ありがとうございます。この和竜の地に人の数は多く口の数は多くても、私に愛国心があるということを認めてくれたのは金司令しかおりません」

彼は、自分はこれまで心が狭くて反共に走ってきたが、容共に立つにはどうすればよいのかと聞いた。

主席は、容共は何も特別なものでない、反満抗日によって革命軍を支援してくれるのも容共だ、朝鮮の地主にとっても中国の地主にとっても、容共抗日は第一の愛国大事である、と話した。

次の日から、彼は妙に無口な人になってしまった。どこか具合が悪いのかと尋ねても、ただ違うと答えるだけだった。

主席に会って話を交わす過程でその大きな度量と包容力に感化され、自分の過去を悔い改めていたのであった。

劉通事は、主席の食事のことまで心配しながら、私が持ってきた食糧があるのになぜみな粥だけ食べているのか、米を節約しようとするならもちろん理解できる、だからといって、司令官にまで粥を差し上げるのは道理に反することではないか、と言った。

反共に走っていた彼は、このように金日成主席を心から敬慕する別人になり、その後からは遊撃隊への物心両面における積極的な支援を行った。

銃眼をわが身でふさいだ遊撃隊員

金日成主席は、ソ連がカルキンゴルで苦戦していた時、「ソ連を武力で擁護しよう！」というスローガンをかかげ、朝鮮人民革命軍の各部隊に敵背攪乱作戦を展開すると

いう新しい命令書を作成して下達した。

その命令書に従って1939年の夏、朝鮮人民革命軍の各部隊は多くの戦闘を行い、日本帝国主義のソ連侵攻を阻止するのに大きく貢献した。

その代表的な戦闘が1939年8月の大沙河戦闘である。

大沙河は高い土城に取り囲まれ、その四角には砲台が配置されていた。

城内には警察と自衛団が駐屯し、「満州国」軍の1個中隊が出入りしていた。

襲撃隊は、夜明け前に土城の下の野菜畑近くに至って草原や窪地に身を隠し、指揮官の合図を待っていた。城門歩哨の撤収する時を狙ったのである。

ところが、折あしく土城の北門から野菜畑に出た一人の満州国軍に見つけられた。

襲撃隊は直ちに襲撃を開始した。敵は、高い土城と堅固な砲台に依って頑強に抵抗した。もし、そのまま応戦が続くなら、襲撃戦がいつ終わるか見当がつかなかった。

襲撃任務を受けた中隊は、敵の機関銃が猛烈に射撃している砲台に向かって這って行った。

中隊長が襲撃隊の突撃路を開こうと、砲台に向かって手榴弾を投げた。

敵の機関銃が射撃を止めた。機会を逃がさず中隊は突撃に移った。

ところが、機関銃が再び火を吐きはじめた。誰かがまた手榴弾を投げたが、その機関銃はもっと激しく撃ちまくっていた。

この時だった。

「小隊長！　後を頼みます」

襲撃隊員の金振がこの一言を残し、砲台に向かってすばやく這って行った。

敵の銃眼をにらんでぱっと身を起こした金振は、火を吐く銃眼の前に猛虎のように飛び掛かった。

「ドカン……」

地面を揺るがす爆音と同時に、機関銃の猛射がばったりと止まった。赤黒い煙が砲台を包んだ。

彼は最後の力を振り絞って言った。

「小隊長！　みなさん！　司令官同志に従って祖国解放の日まで頑張ってください。……」

金日成主席は、金振の英雄的犠牲について非常に胸を痛めた。

金振は、主席が部隊を率いて第2次北満州遠征を断行した時に入隊した、作男出身の隊員だった。

敵の銃眼を胸でふさぎ、部隊の突撃路を開いた金振は、大沙河の名も知れない丘に安置された。

7. 小部隊活動の日々に

新しい戦略・戦術への移行

金日成主席は、1940年8月10日と11日に敦化県小哈爾巴嶺で開かれた朝鮮人民革命軍の軍・政幹部会議で新しい戦略的方針を打ち出した。

主席は会議で、祖国解放の大事を主動的に迎えるために、朝鮮人民革命軍の力を保持・蓄積しつつ、彼らを有能な政治・軍事幹部に育てるという戦略的課題を示した。

その戦略的課題を円滑に遂行するため、大部隊作戦から小部隊作戦へ移行するという新たな方針が提示された。

祖国解放の大事を主動的に迎える準備を整える上で最も重要なのは、朝鮮革命の中核勢力である朝鮮人民革命軍の力を蓄積しながら、彼らを有能な政治・軍事幹部に育てることであった。

朝鮮人民革命軍の力を蓄積しながら、彼らを有能な政治・軍事幹部に育てることによってのみ、日本帝国主義者との最後の決戦で輝かしい勝利を勝ち取り、彼らを根幹にして解放された祖国に新しい朝鮮を建設することができた。そのため、無謀な戦闘による損失を避け、主動的な行動によって革命力量を保持・蓄積することが革命の最も重

要な戦略的課題として提起されていた。

この戦略的課題を順調に遂行するためには、大部隊作戦から小部隊作戦へ移行しなければならなかった。

祖国解放の大事を主動的に迎えるためにはまた、朝鮮人民革命軍の力を蓄積するとともに、人民を政治的、思想的にしっかりと備えさせなければならなかった。

朝鮮人民革命軍が大部隊活動から小部隊活動へ移行するのは、わが国の反日民族解放闘争の要請であるばかりでなく、コミンテルンの勧告でもあった。

主席が示した大部隊活動を中止して小部隊活動を展開するという新たな戦略的方針は、変化した情勢に対処して朝鮮革命の勝利を早め、世界革命を発展させる最も正しい方針であった。

極東入りの決心

1940年10月中旬、コミンテルンの二人の連絡員が金日成主席に会うために、死線をくぐり抜けて車廠子の奥地の臨時秘密根拠地を訪ねてきた。

彼らは主席に、12月にコミンテルンがハバロフスクで招集する会議に参加することを要請しながら、満州で活動す

る全ての抗日武装部隊が大部隊活動から小部隊活動に移り、ソ連の極東に基地を定めて兵力の収拾・再編をはかるために早いうちにソ連に入るのがどうかという意見を提議した。

主席は、その提議を受けて深い思いにふけった。

当時、朝鮮人民革命軍は多くの障害と難関に直面していた。

日本軍は、朝鮮人民革命軍を壊滅しようと食糧など戦略物資の統制をいつにもまして強めていた。そのため、食糧の解決は朝鮮人民革命軍にとって死活の問題となっていた。

また、敵との熾烈な戦闘の中でかなりの指揮官が犠牲になった。

コミンテルンの要請を受けた主席は、幾夜も明かしながら抗日武装闘争の前途について深く考えた。

主席は、コミンテルンの招請と提議が、朝鮮人民革命軍が安全な基地を築き、朝・中・ソ三国の革命武装力間の実際の連合戦線を形成し、朝鮮人民革命軍の小部隊と班の活動を積極化しようとする自分の見解と一致すると認めた。

主席は、コミンテルンが招集しようとする会議の趣旨が明白であり、また東北抗日連軍の他の指揮官たちもすでに到着しているという実情にてらして、ソ連領内に入って会議に参加することを決心した。

すると隊員たちは、「司令官同志、祖国の地からさらに遠く離れ、これまで戦ってきた土地をしばらくの間とはいえ再び離れるとなると、心さびしくなります。コミンテルンが重要な会議を招集して司令官同志を招いているんですから、将軍をはじめ数名のメンバーだけ行くことにし、あとは残って戦いを続けてはいかがでしょうか」と請願した。

しばらく考えていた主席は、われわれが極東入りするのは、革命を放棄してしまおうというのではなく、またそこへ行って永久に落ち着こうというのでもない、私の考えは、昨年コミンテルンが招集した会議にも参加できなかったので、今回の会議には参加しようというのだ、……そうするのがわれわれにとって有利であるはずだ、しかし、その会議がどれくらい長引くかは分からない、それでその会議に参加する際、君たちを連れていこうというのだ、越冬の準備も不十分な状況の下で、君たちだけ残して行くわけにはいかない、と隊員たちを説得した。

こうして主席は、司令部直属の隊員たちと共に極東への行軍路についた。

その行軍は厳しくて試練に満ちた道だった。

しかし、その苦難に満ちた行軍が朝鮮革命の前途に新しい黎明を呼び寄せる道であることは、当時誰も知らなかった。

孟山村の奥地での宣言

満州一帯に展開されている日本軍「討伐隊」の執拗な攻勢がいつにもまして悪らつになり、革命隊伍の中では裏切り者や逃走者が現れるなど不正常なことが相次いだ。

それで司令部の位置を孟山村の奥地に移したが、また一人が変節したので、貯蔵しておいた越冬用食糧さえ敵の手に入るようになった。

司令部の一部の警護隊員は不安を隠せなかった。

隊伍を維持できるのか、司令部の安全を守れるのか……

厳しい現実は、良心と信義がなくては信念を守ることができず、信念と意志がなくては革命を進めることができないということを示していた。

主席は、指揮官と隊員を集めて忌憚なく話した。

――情勢はさらに厳しさを増すだろう。われわれの革命偉業が実を結んで国の独立が達成されるというのは誰もがひとしく信じていることだが、その日がいつごろかは誰にも分からない。われわれは10年もの間あらゆる苦労をしながら戦ってきたが、そういう苦労がこれから5年続くか10年続くかは推定しがたい。

しかし明白なのは、最後の勝利は必ずわれわれのものだということだ。

心の琴線に触れる主席の一言一言に、場内は静まり返っていた。

――もちろん、この道には幾多の難関が横たわっている。これまでの難関より数倍、数十倍の難関もありうる。だから、最後まで私に従って革命を続ける自信のない者は家に帰ってもよい。

家に帰るという者には旅費も途中の糧食もあてがう。そして、闘争を中断したことも問題視しない。力が弱く自信がなくて隊伍を離れるのは仕方ないことだ。行く者は行け。だが別れの挨拶はして行け。

瞬間、周囲は厳粛な雰囲気に包まれた。

「将軍、革命の勝利の日を見ずに死んでもかまいません。死んでも生きても将軍のそばを離れません」

「人間の寿命は知れたものです。同志を裏切り、山を下り、敵に頭を下げて生きるくらいなら、ここで戦って死ぬほうがましです。将軍と生死を共にします」

火を吐くような信念と意志の誓いを聞き、主席は彼らを力の限り抱擁した。

孟山村の奥地での会議、それは離れることもできず、離れてもならない司令官と戦士との混然一体、指導者と

大衆の鉄桶のごとき統一団結を今一度実証した会議であった。

50個の粉紙袋

小部隊活動時期のある日、金日成主席は、呉白竜の小部隊からの連絡員が来る途中「討伐隊」と遭遇し、司令部との連絡を取れず犠牲になったという悲報を受けた。

その後、主席は数回も連絡員を派遣して呉白竜の小部隊を捜そうと努力したが、その行方はもっとおぼつかなくなった。

日が経つにつれ、主席の心配は募るばかりだった。

そうしたある日、司令部は宿営地を移すことになった。

隊員たちが行軍の支度を整えている時、主席は、意外にも焚き火の跡に食糧と新しく作った冬服を埋めるよう指示した。

わけを知らずにいた隊員たちは、連絡の切れた小部隊のことを思っての指示だということに気付いた。

行軍途中、司令部の食糧事情は困難をきわめていた。隊員たちはまともな食事ができず、ヤナギヒゴタイの粥だけで飢えをしのいでいたので体力が甚だしく衰えていた。

ちょうどその時、大きな鹿1匹が仕留められ、隊員たちを喜ばせた。

久しぶりに肉汁を前にした隊員たちの顔には喜びが溢れていたが、主席は呉白竜の小部隊のことで箸を取れずにいた。

主席は隊員たちに、残った鹿肉を干して粉にし、それを50個の紙袋に分け入れるようにした。

そしてその紙袋に、連絡の切れた小部隊隊員の名前を一字一字書き込んだ。

主席は伝令に、それをよく保管し、呉白竜の小部隊に会えば渡そうと言った。

その後、司令部の隊員たちは飢えながらも、生死を分かつ困難な戦闘の中でも、50個の粉紙袋だけは手を付けず大事に保管した。

死線を越えるあの苦しい状況の中でも小部隊のメンバーを先に思う主席の情愛が、わずか2合ほどの粉紙袋にありありとこもっていた。

この世にまたとない話

1940年の厳しい冬が迫ってきた。

試練の日々を経て、金日成主席の率いる小部隊はやがてソ連国境近くにたどり着いた。

1カ月もの間敵と戦いを交えながら苦難に満ちた行軍をし

てきたので、隊員たちはずいぶん疲れていた。

金日成主席が宿営命令を下すと、戦闘と行軍によって疲れ果てた隊員たちは、焚き火をたき、その周りで間もなく眠ってしまった。

ところが、抗日の女性英雄金正淑女史だけは、休むひまもなく、背のうの中にしまっていた洗濯物を取り出して小川のところに行った。

洗濯を終えた金正淑女史は、焚き火のそばに木枝を挿し、洗濯物を干していた。

ところが、だしぬけに非常招集がかけられた。敵が現れたのである。

この日小部隊は、夜明けの冷たい風をかきわけながら行軍した。風がいとも強かったので、全身が凍えてきた。

長い行軍が終わって隊伍が宿営地に着くと、金正淑女史はよく手入れした洗濯物を主席に差し出した。

主席は、なにげなくそれを受け取った。

ところが、金正淑女史が司令部のテントから帰った後、その洗濯物のいわれについて知るようになった。

金正淑女史が、主席の洗濯物を洗って行軍中自分の体のぬくもりで乾かしたのであった。

誰にも知られないようにした善行だったが、それに感嘆する女子隊員のうわさを聞いた主席は、すぐ金正淑女史を

司令部に呼び出した。

主席は、ひどく凍えて真っ青になった金正淑女史の顔を見て、胸が熱くなった。

主席は、正淑、私を思っての君の誠意には頭が下がる、それだけはいつもありがたく思っている、しかし、どんなつもりでそんなことをしたのだ、そんなことをして傷寒にでもかかったらどうするのだ、君を犠牲にしていい目を見ても、私の心が安らぐはずはない、二度とそんなことをしてはいけない、と言った。

金正淑女史が帰った後、主席はテントの外に出て長い間降り注ぐ雪の中を歩いた。

悪寒をもよおしながらも、歯をくいしばって顔に表わすまいとしていた金正淑女史の姿から、異国の地に葬られた愛する母親の姿を思い描いている主席の目は潤んだ。

8. 最後の決戦に備えて

金策との初対面

ハバロフスク会議前のある日、北満省党委兼東北抗日連軍第3路軍の政治委員として活動していた金策が、金日成主席の宿所へ訪ねてきた。

まだ40にもならない年で前頭部がはげかかった彼の落ち着いた姿に、主席はひと目で心が引かれた。

主席は、初対面であるが、旧知のように思われると言った。金策もやはり、金日成同志とは初対面だという気が少しもしないと言った。

「金司令に会うのにこんなに遠回りさせられるとは……」

初対面の挨拶がすむと、金策が独り言のように言った。

「私は早くから金司令を注視してきました。われわれ北満州の朝鮮革命家がどれほど金司令に会いたがっていたか分からないでしょう。われわれはいつも金司令部隊のいる白頭山に思いを馳せながら戦いました」

北満州部隊の高位職にあった金策は、年齢からしても革命闘争の経歴からしても、満州パルチザンの朝鮮人軍事・政治幹部の中で長老格にあたる人物だった。

金策は、情熱の燃える目で主席を見つめた。

うわさよりも若くて素敵であり、歩き方や身振り、手振りに至るまで全てが将軍らしくおおらかで活動的であり、素朴で親しい声と慈愛深い微笑の持ち主である主席に、金策はすっかり魅了された。

「将軍！　私はこれから将軍の部下として戦い、将軍のそばで死にます。将軍のそばにいられるなら、私には軍職も党職も要りません。ですから、これからは省委ではなく、金策さんと呼んでください」

主席は立ち上がって、彼の真摯な眼光を見つめながら、互いの心と心をつなぎ、同志的友情と愛を確約した今日を永遠に忘れないようにしようと言った。

主席と金策との初対面の夜は、このように更けていった。

他郷で迎えた春

1941年3月1日、極東の南キャンプの軍事訓練基地では、金日成主席の参加の下に、部隊全体が運動場に整列して3・1人民蜂起22周年を記念する行事が行われた。

行事が終わって午後になると、さらにいい天気になり、雪が暖かい陽光に解けながらさわやかな春の情趣を添えていた。

隊員たちがいきなり主席のところへやってきて、「将軍、小部隊の工作に出かければいつまた会えるか分からないから、写真を撮って記念に残しましょう」と申し出た。

主席は、春の水気を含みはじめた樹木にもたれて、戦友たちと写真を撮った。久しぶりに南キャンプで再会した記念、会ってはまた別れる記念だったので、場内は賑やかだった。

数名の女子隊員も主席のところへ駆け付けてきて、自分たちも撮ってほしいと言った。

写真を撮った女子隊員たちは、何かを相談し合った後、主席に金正淑女史と共に写真を撮るようにと勧めた。

主席が金正淑女史と結婚する時のことをつねに口惜しく思っていた彼女たちだった。全部隊に食糧が切れて食事もろくにできずにいた時だったので、涙の中でその日を過ごしたのである。そのことを忘れられずにいた彼女たちは、今日良いチャンスに恵まれたついでに、その埋め合わせをしようとしたのである。

金正淑女史はそれを聞いて、女子隊員たちの後ろに隠れてしまった。

女子隊員たちに無理やりに押された金正淑女史が、笑みを浮かべて主席のそばに立った。

隊員たちの祝福を受けたその歴史的な瞬間にカメラのシャッターが切られた。

こうして、金日成主席と金正淑女史が共に撮った写真が歴史に残るようになった。

まことに忘れられない春の日であった。

王八脖子事件

王八脖子事件は、朝鮮革命が厳しい試練に直面していた1941年春に起こったことである。

ある日、金日成主席は一隊員に、王八脖子に派遣された工作班からなんの連絡もないのは不正常なことだとし、連絡地点へ行って調べることを指示した。

その隊員は急ぎ足で連絡地点に行った。しかし、いくら探しても班のメンバーを見つけることができなかった。

そうするうちに、皮のはげた木に炭で書いた文字を見つけた。

「池甲竜は逃亡し、金益顕と金鳳禄は飢え死にした」

胸がどきんとした彼は、あわただしく草むらの中を掘り出した。しばらくしてそこに並んで横たわっている二人の隊員が現れた。彼らは完全に失神状態に陥っていた。

派遣された隊員の並々ならぬ努力によって、彼らは司令部に到着するようになった。

しばらく後、気を取り戻した二人の隊員は主席に事の顛末を報告した。

工作班が王八脖子の裏山に到着した時、池甲竜は山頂から村を見下ろすだけでなんの工作もせずにいた。一緒に行った金鳳禄が、村に下りて食糧工作もし、政治活動もしようと言うと、彼は今は敵情が厳しくて動くのは危険だから待つしかないと答えた。

金益顕が池甲竜に、すぐ工作を始めるべきだと主張すると、彼は敵情がどうのと口実を設けながら依然として聞き入れようとしなかった。

その翌朝、池甲竜は二人の隊員が洗面に行ったすきに彼らの銃を奪い取り、こう言った。

俺はこれまで10年近く武装部隊と一緒に行動した。その過程で苦労という苦労をなめつくしながらも、苦労の末には朝鮮が独立するものと考えて耐え抜いてきた。しかし、今はその夢が破れてしまった。君たちも知っている通り、日ソ間には中立条約が締結された。俺は、ソ連と日本の間には根深い敵対的矛盾があり、やがて戦争が勃発するものと信じてきた。戦争が起これば、ソ連軍と協同して日本軍を撃滅し、祖国を解放できるものと考えていたが、もはやそれも望めなくなった。だから、こんな空しいことはまっぴらだ。その上、持病までこじれてどうしようもない。俺

は家に帰るつもりだ。……

池甲竜の逃亡後、金益顕と金鳳禄は約束の連絡地点へ向かった。数日間、何も口にしていない上に、途中で敵に遭遇して遠回りしたので、予定の時刻よりかなり遅れて連絡地点に到着した。そのため、司令部の連絡員に会えなくなったのである。

金日成主席は、池甲竜の背信は革命勝利に対する信念を失ったために起きた事件でもある、革命家にとって信念がなければ革命家の生命はおしまいだ、革命勝利への信念は自分の力、自分の人民の力に対する信頼から生じ、自分の指導者、自分の集団に対する信頼によって守られるものだ、と言った。

隊員たちは主席の言葉を聞きながら、今後行く手にどのような火の海やいばらの道が横たわるとしても、「われわれの力で朝鮮革命を完遂しよう！」という旗を高くかかげていく信念の誓いを立てた。

大慶事

祖国解放の大事が近づいていた1942年2月16日。

この日、白頭山密営に漂う新春の馥郁たる香りに陶酔していた遊撃隊員たちは、感激的な報に接した。

白頭山密営の小ぢんまりした丸木小屋で、金日成主席の革命偉業を代を継いで継承していく息子が誕生したということだった。

胸の躍るこの知らせが届くと、隊員たちは歓声を上げながら周辺の樹木に文字を書き込んだ。

「ああ、白頭光明星の誕生を告げる」

「同胞よ、見ているか、聞いているか、白頭山に金隊長の志を継ぐ光明星が現れた」

この激動的な知らせは、全国各地で活動する朝鮮人民革命軍の小部隊や工作班と極東の基地に速やかに広がった。

国内に派遣された小部隊や工作班のメンバーと政治工作員たちは、白頭光明星を迎えた民族の大慶事を一日も早く全国の人民に知らせるべく、各地の樹木に文字を書き記した。

偉大な指導者金正日国防委員長の誕生は、何ものにも比べられない民族の大慶事であった。

コミンテルン解散についての見解

朝鮮人民革命軍が今後到来する祖国解放の大事を迎えるための準備を進めていた1943年5月のある日、意外にもコミンテルンが解散されたという消息が極東基地に届いた。

これは、朝鮮人民革命軍の隊員たちに大きな衝撃を与えた。

当時人々は、コミンテルンを世界の革命的人民、共産主義者、革命家を統一的に指導する国際的な指導機関だと見なし、そこで提示される全ての戦略と戦術、路線と方針を受け入れて実行しなければならないという認識を持っていた。

コミンテルンの解散は、大きな波紋を起こす歴史的な出来事だと言わざるを得なかった。

そのため、この問題についてまちまちの見解が出されていた。

金日成主席は、指揮官たちを司令部に呼んだ。

主席は、この頃コミンテルンの解散についていろいろな説が飛び交っているが、これに対する正しい見解と立場を持つのが必要であるため、今日集まってもらったと言い、こう続けた。

――われわれは抗日革命の初期から外国の力や援助に頼らず、自分の力で朝鮮革命を遂行してきた。今までわれわれは、革命発展の各時期、各段階に独自の路線と戦略戦術、方針を打ち出し、それを実行してきたし、革命勢力も人民に依拠して整え、万事を自主的に開拓してきた。

われわれはこれに当然自負を持たなければならない。これまでの革命闘争経験は、自主的立場にしっかり立って自国人民の力に依拠して全ての問題を解決していくのが革命

を成功裏に導けるキーポイントであることを示している。われわれは今後もこれまでと同様、自主性と独自性が革命の核であり、生命であることを常に肝に銘じ、提起される全ての問題を自分の力と知恵をもって解決していかなければならない。

祖国のことを知るべき

1943年9月中旬のある日、金日成主席はある指揮官に、大きな朝鮮地図をつくるようにと指示した。そして地図には、主な山や川、平野、湖、地下資源、各地方の特産物、名勝や文化遺跡などをもれなく書き入れるようにと言い含めた。

主席から任務を受けた彼は、数冊の参考書を見ながら地図を作りはじめた。まず、4枚の白い全紙をつなぎ合わせ、そこに緯度と経度を引き、わが国の領土の輪郭を描いた。その上にいろいろな色鉛筆で内容を一つ一つ書き表した。

完成された地図を見た主席はとても満足した。

主席は、政治学習の時間にこの地図をかかげて、朝鮮人民革命軍政治幹部及び政治教員を前にして、『朝鮮の革命家は朝鮮をよく知るべきである』と題する演説を行った。

主席は、祖国解放の大事が近づいている情勢は、朝鮮人民革命軍の指揮官と兵士をして祖国についての学習に努めることを求めていると言った。

主席は、民族の優れた伝統も知らず、民族的自尊心と革命的自負もなければ、卑屈な民族虚無主義者、事大主義者に転落する、みなが熱烈な愛国者、真の革命家として生き、戦うために自民族の歴史を深く研究すべきだ、と強調した。

そして、わが国の地理についてもよく知らなければならないとし、われわれが革命を行う最高目的は人民に裕福かつ幸福な生活をもたらすことにあるのだから、われわれは解放された祖国で工業と農業、水産業など各分野の経済を復興・発展させなければならない、と語った。

主席の演説は、聴衆の心を完全にとらえた。

司令官の模範落下訓練

金日成主席は、極東臨時基地で朝鮮人民革命軍の集中的な軍事・政治訓練を組織・指導しながら、射撃訓練、水泳訓練だけでなく空挺作戦のための落下訓練にも深い関心を払った。

朝鮮人民革命軍が数日後に予定される飛行機による初の落下訓練を前にして、最終予備訓練に熱中していた1944年5月下旬のある日。

訓練場に出向いた主席を見た隊員たちは、驚きを隠し切れなかった。

主席が落下傘服を着て飛行機の前に近寄るのであった。

主席が模範落下動作を見せるために訓練場に出たことを知った隊員たちは、主席の前に立ちはだかり、模範落下訓練だけはなんとか止めてほしいと重ねて懇願した。しかし、主席は、飛行機に乗り込んだ。

やがて、主席の乗った飛行機が滑走路に沿って走り、空に飛び上がった。

一定の高度に至った飛行機は、訓練場の上空を悠々と旋回した後、青空に黒い点を落した。

その点は矢のように落ちるかと思うと、綿花ふさのように咲いた。それが徐々に降り、だんだん落下傘の輪郭を現しはじめた。

ついに落下傘が空地の草原に降りた。手に汗を握って注視していた隊員たちは、「司令官同志！」と声を限りに呼びながら一斉に駆け付けた。

主席の実践的模範に励まされた隊員たちは、訓練に一層頑張るようになった。こうして、飛行機による落下訓練を

行う日には、一人の落伍者もなく全ての隊員が落下地点に無事着地した。

最初の女性空挺隊員

落下訓練は、水泳やスキーに比べて肉体的負担と胆力が要る訓練なので、朝鮮人民革命軍の女子隊員にとっては実に力に余る訓練だった。

ある日、訓練場に赴いた金日成主席は、体質上から見ても子持ちの女性や体の弱い女性は訓練から除外したほうがよいだろうと言った。

「司令官同志、私たちが一度も男子隊員に後れをとったことがありますか？　私たちが女性だからといって落下訓練から除外するなら、祖国解放作戦に堂々と参加できなくなるでしょう。そうはいけません。どんなことがあっても一生懸命に訓練に参加して、立派な女性空挺隊員に準備してみせます」

主席は、そのような信念が肝心なのだ、自分はわが女子隊員の革命的気概と英知を信じる、と励ました。

ついに、女子隊員たちは飛行機に乗って落下する訓練に加わるようになった。

金正淑女史も飛行機による最初の落下訓練に参加するために、女子隊員たちと一緒に飛行場へ向かった。

金正淑女史が一番先に飛行機から飛び降り、正確な動作で落下地点に向けて降下した。

その姿から大きな自信と勇気を得た女子隊員たちはみな、一人一人飛び降りはじめた。

訓練の初めから女子隊員の落下訓練を見守っていた主席は、みなさんはわが国の5000年の歴史で初めて飛行機に乗って落下した最初の女性空挺隊員だ、朝鮮女性の優れた英知と強い意志をよく示した最初の女性空挺隊の落下の成功を熱烈に祝う、と言った。

男子隊員たちが走ってきて、女子隊員たちに花束を与えた。

その花束は、わが国初の女性空挺隊員が受けた祖国からの感謝の挨拶であった。

9. 抗日大戦の勝利

白鶴山に響き渡ったこだま

1945年5月9日、朝鮮東海岸一帯で活動していた朝鮮人民革命軍のある小部隊は、金日成主席からの緊急電文を受けた。

電文は、5月9日にファシスト・ドイツが無条件降伏をした、急変した情勢に対処して司令部が国内の白鶴山臨時秘密根拠地に出向いて会議を招集する計画だから、その準備に万全を期するべきだという内容だった。

数日後、主席は祖国の地に足を踏み入れた。

白鶴山の頂に到った主席は、根拠地の鏡台岩に上がって周辺を見回し、根拠地が有事の際に一役果たせるうってつけの場所に位置していると言いながら会議場へ向かった。

根拠地では、朝鮮人民革命軍指揮官及び革命組織責任者の非常会議が開かれた。

主席はまず、急変した国内外の革命情勢を分析し、祖国解放のための最後の攻撃作戦時期が目前に迫っていることを厳かに宣言した。

そして、日本帝国主義者は今、罪なき朝鮮人民を強制徴集して不足する兵力を補充し、わが国でファッショ的暴圧をかつてなく強めて人的・物的資源をことごとく略奪し、わが人

民に耐えがたい苦痛と災難を強要している、これは、全軍、全人民が力と心を合わせて朝鮮民族自らの力で最後のあがきをしている日本帝国主義の最後の息の根を止めるための決戦を繰り広げることを要求している、と強調した。

——緊迫した今の状況の下で、全ての朝鮮人民革命軍と人民が果たすべき至上の革命任務は、日本帝国主義との最後の決戦をいつでも繰り広げられるように万端の決戦態勢を早急に完成することです。客観的な情勢がいかに有利であっても、全ては革命の主人であるわが人民自らの闘争にかかっています。われわれは革命と時代に対して担っている使命を深く自覚し、自力独立の旗印の下に抗日武装闘争の日々に育成し、保存・蓄積してきた全ての反日愛国勢力を総動員して日本帝国主義との最後の決戦を繰り広げなければなりません。

「全ての力を抗日大戦の最後の勝利のために！」、これが今日、われわれが高くかかげていくべき戦闘的スローガンです。

演説を終えながら主席は、勝利は祖国の解放と人民の自由のための正義の戦いに奮い立ったわが人民の側にある、あらゆる力と知恵を引き出して必ず祖国解放の偉業を成し遂げ、われわれが歩んできた血みどろの戦闘の数万里の道を祖国解放へ続行させよう、と熱烈に呼びかけた。

ジュダノフとの談話

対日作戦が間近に迫ったある日、金日成主席はソ連軍総参謀部が招集した会議に出席するため、連合軍の指揮官たちと共にモスクワへ行った。

数日後、主席はソ連共産党中央委員会政治局員兼書記を務めていたジュダノフに会った。

ジュダノフは、スターリンの委任により東方から来た使節に会うことになったと前置きして、朝鮮人民革命軍の抗日武装闘争を激賞した。彼は、朝鮮のパルチザン金日成将軍のことをいろいろと聞いていたが、思っていたよりもずっと若く見えてうれしいと言った。

その日ジュダノフは、解放された朝鮮を民主主義的独立国家につくりあげる方途についての主席の見解を知りたがっていた。

話し合いの途中、ジュダノフはだしぬけに、朝鮮人は国の解放後何年ぐらいで独立国家を建設できるだろうかと尋ねた。

主席は、長くても2、3年なら十分だろうと答えた。

主席の返事を聞いたジュダノフは両手をこすりながら

喜んだ。それでもなお、意外だといった表情は隠そうとしなかった。

主席は、朝鮮人民が長期にわたる抗日武装闘争と民族解放闘争を通して政治的に大きく目覚め、鍛えられた、その過程で自力で国家を建設できる堅実な指導中核と広範な愛国勢力が形成され、豊かな闘争経験と無限の創造力、洗練された組織力と強力な動員力を備えるに至った、と言った。

ジュダノフは主席の説明を注意深く聞いた後、解放後の朝鮮人民の建国闘争にどのような支援が必要だろうかと尋ねた。

主席は、ソ連がドイツと4年間も戦い、今度はまた日本と大戦争をしなければならないのに、何の力があってわれわれを援助するというのか、もちろん援助してくれるのはありがたいが、われわれは可能な限り自力で国づくりをするつもりだ、わが国では歴史的に事大主義が亡国の根源として存在し続けた、新しい国の建設では、事大主義の弊害が絶対に生じないようにするのがわれわれの決心だ、われわれが期待するのは、わが国へのソ連の政治的支持だ、ソ連が今後、国際舞台でわれわれを積極的に支持し、朝鮮問題が朝鮮人民の利益と意思に即して解決されるよう努力してくれることを望む、と言った。

ジュダノフは主席の言葉を聞き、満足した。

高く評価された部隊機動訓練計画

1945年7月中旬のある日、当時、副小隊長を務めていた呉振宇は、伝令から金日成主席が呼ぶという連絡を受けて急いで司令部に駆け付けた。

彼が司令部に入ると、主席は仕事の手を休めて喜んで迎えながら「呉振宇君、ここに座りたまえ」と席を勧めた。

主席はこれまでの軍・政訓練情況について具体的に聞いて、このように述べた。

——今日、君を呼んだのは重要な任務を与えるためだ。数日後に部隊の総合戦術訓練が行われるが、その時に実行する部隊の機動訓練計画を作成してみなさい。数年間の軍・政訓練期間に学んだ知識に基づいて科学的な計画を立てるべきだ。これは、君がどれほど高い職務を遂行できる資質があるかを点検する重要な契機になるだろう。

部隊の機動訓練計画を作成するのは、参謀部での活動経験を持っている指揮官も慎重に対することだが、小隊の指揮経験しかない彼にとってはあまりにも力に余る任務だった。

彼はあわてて席から立ち上がった。

「司令官同志！　信頼はありがたいですが……私は部隊

の機動訓練計画を立ててみたことは一度もありません。まして、部隊級の機動訓練計画を作成できるはずがありません。他の任務ならともかく、部隊の機動訓練計画を作成するのは本当にむずかしいことです」

困った顔をしている彼を眺めていた主席は、慎重な面持ちで言った。

――もちろん一度もやってみたことがないから力に余るだろう。しかし、何事であれやり遂げようとする決心を持って取り組むなら、次第に経験や知識も積まれるものだ。

部隊の機動訓練計画を立てるのも同じことだ。やってみたことがないとして最初から尻込みすると、今後より高い職務は遂行できないだろう。君は遊撃隊に入る前から銃を撃つことができたのかね。遊撃隊生活の過程で射撃も覚え、政治軍事知識も積んだのではないか。だから、多年間の遊撃闘争経験と集中軍・政訓練期間に学んだ知識に基づいて、部隊の機動訓練計画を作成してみるべきだ。

主席の信頼のこもる言葉に、彼は心を決めて答えた。

「司令官同志の任務を必ず遂行します」

その日から彼はいろいろの資料を研究した上で、訓練計画を作成しはじめた。しかし、何日間も夜を明かしたが、

思うようにはかどらなかった。

主席が与えた任務遂行日まではわずかしか残っていないのに、いまなお無為無策だから彼はいらいらしていた。

ところが、意外なことに主席が彼を訪ねてきた。

主席は気をもんでいる彼に、当面の祖国解放作戦の時に君が高い職務を担当したり、祖国が解放されてから軍事教育活動か師団、軍団クラスの責任ある地位につくようになるとどうするつもりか、今から訓練計画も立ててみ、大きな作戦計画も自分の力で作成してみなければならないとし、部隊の機動訓練計画の作成方法を改めて具体的に教えた。

彼はすぐ訓練計画の作成に取り組んだ。

主席が抗日武装闘争を指導した全期間に示した新しい戦略・戦術的方針を深く研究した彼は、長年の遊撃闘争で得た経験、今度の集中軍・政訓練期間に学んだ知識を最大限に活用して要綱を作成し、訓練計画を綿密に立てた。

こうして提出された訓練計画は主席を大いに喜ばせ、部隊の戦闘力強化にも大きく寄与するようになった。

彼ばかりではない。

主席のこのような信頼と愛情の下、朝鮮人民革命軍の全ての隊員が現代戦を指揮できる能力を養い、れっきとした軍事指揮官に育ったのである。

直接指導した総合戦術訓練

金日成主席は、祖国解放を目指す最後の攻撃作戦の構想を実践に移すための朝鮮人民革命軍部隊の総合戦術訓練と空挺隊総合戦術訓練、海岸上陸総合訓練を直接指導した。

総合戦術訓練は、豆満江沿岸の敵の要塞区域が位置している地形と似ているアムール川沿いの樹林地帯で行われた。

主席の命令に従って砲兵と飛行隊の準備打撃が開始された。攻撃の準備打撃が「敵」の防御陣地の奥に移されるのと同時に、工兵が鉄条網や地雷畑に通路を開き、歩兵が突撃へ移行して抵抗する「敵」を掃滅しながら高地を攻撃した。

「敵」は新しいトーチカに頼って頑強に抵抗した。こうした状況の下で、わが軍の一部の兵員で編制された小部隊を側面に迂回させ、「敵」を背後から打撃するようにした。その結果、わが軍は再び攻撃を始め、成果を拡大しつつ「敵」に対する追撃戦に移った。

主席は、訓練の全過程で新しい状況を設定し、隊員たちの戦闘行動を細かに指導した。

ある中隊が「敵」のトーチカを破壊するための戦闘行動を展開する時だった。

主席は中隊に新しい状況を設定した。

——偵察班の報告によると、「敵」のトーチカは三つとなっていたが、実際は二つが余計に現れた。三つのトーチカを掃滅する戦闘計画を立てて攻撃したのに、二つのトーチカがさらに現れたのだから、この場合、君はどうするつもりか。

全く思いも寄らぬ状況なので、指揮官はうろたえて満足な答えもできなかった。

主席は、指揮官はこのような新しい複雑な状況に臨機応変の計略で対処しなければならないとし、具体的な指示を与えた。

——ただいま設定された状況に正しく対応するには、「敵」のトーチカの配置状態を正確に確かめた上で、一部のトーチカはトーチカ爆破班に破壊させ、トーチカ爆破班が爆破できないトーチカは小部隊を組んで「敵」の背後に進出させ、背後からトーチカを掃滅する戦術を用いなければならない。

指揮官は主席の教え通りに戦闘班を組んで新しい「敵」のトーチカを破壊させ、中隊はその成果を利用して再び攻撃の成果を拡大していった。

みなが意気軒昂として退却する「敵」に容赦なきせん滅の銃弾を浴びせた。

それこそ、祖国解放の決戦場を思わせる胸のすくような光景だった。

対日作戦の突破口

1945年8月9日、金日成主席は朝鮮人民革命軍の各部隊に祖国解放のための総攻撃戦を開始するという命令を下した。

その時主席は、最後の攻撃作戦に先だって、朝鮮人民革命軍の各部隊に、雄基郡土里、琿春県南別里など敵の国境要塞区域の軍事要衝を奇襲して敵軍の防御体制を混乱させ、要塞区域内の兵員と火器機材に打撃を加えるよう命じた。

連合作戦で第1極東戦線軍司令部が何よりも苦慮したのは、最も効果的な打撃を加えうる場所を選択することだった。つまり要塞化された国境地帯のどの地点を叩けば、日本軍の防御体制全般を揺さぶることができるかということだった。

日本軍は国境地帯に「難攻不落の防御線」と誇る要塞を築いておいたが、それらの要塞は、対日作戦の遂行において最大の障害となっていた。

ソ連軍の指揮官たちは要塞線の背後にある関東軍を大敵とみなしたが、主席は要塞線の突破こそ難問だと見た。

開戦に先だって局地戦をやってみようという主席の提案に、第1極東戦線軍の高位指揮官はみな面食らった表情だった。

主席は、対日作戦の突破口を開くには、軍事要衝を何カ所か襲撃して、敵が隠密裏に増強してきた防御体制と隠蔽している兵員及び火器機材を一挙に露出させるべきだと主張した。

こうして朝鮮人民革命軍の一部隊が開戦前夜、豪雨をついて、豆満江一帯に構築された要塞の一角、土里を襲撃した。

土里は慶興要塞区域と雄基—羅津要塞区域に沿った奇妙な位置にあり、土里が落ちれば、敵はその一帯の広い地域を手放さなければならず、慶興要塞も危険にさらされるのだった。

戦闘員たちは土里の警察官駐在所に焼き討ちをかけ、村を解放した。

ソ連軍と連合戦線を形成した朝鮮人民革命軍の別働隊、先遣隊の勇戦によって開かれた突破口は、対日戦の電撃的終結を目指す作戦的意図を貫く上で決定的な契機の一つとなった。

朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦

金日成主席は、祖国解放を目指す朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦計画を作成し、ついで1945年7月、ハバロフスクでソ連の高位軍事指揮官らと共に、国際協約によって対日戦争に参加するソ連軍との協同作戦を行う問題について協議し、具体的な対策を講じた。

主席は、最後の攻撃作戦準備が完了すると、祖国解放作戦計画を実現するための闘争を賢明に指導した。

主席が祖国解放のための最後の攻撃命令を下すと、朝鮮人民革命軍の各部隊は総攻撃へ移行し、日本帝国主義侵略軍を撃滅しながら破竹の勢いで前進した。間白山密営を最後の攻撃作戦の発進基地としていた朝鮮人民革命軍の部隊は、隊伍を増やしつつ作戦計画に予定された通りに進撃し、他の一部隊は人民武装隊と共に羅津を解放し、その戦果を拡大していった。豆満江沿岸に集結した朝鮮人民革命軍の部隊は、一挙に川を渡河して「難攻不落の防御線」と豪語していた敵の国境要塞を突破し、慶源、慶興一帯を解放し、引き続き戦果を拡大しつつ国内の広い地域を解放した。海岸上陸部隊の先遣隊として活動していた一部の部隊

は、地上部隊との緊密な協同作戦によって8月11日に国内に上陸し、戦闘成果を拡大しながら清津一帯へ進撃した。一方、朝鮮人民革命軍の他の部隊は金廠、東寧、穆棱、牡丹江市を解放し、敵を撃滅するための追撃戦を繰り広げながら関東軍に致命的な打撃を与え、豆満江対岸へ進出した。すでに国内に派遣されて活動していた朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員は、人民武装隊と武装蜂起組織、広範な人民を武装暴動へ奮い立たせた。

各方面から進撃する朝鮮人民革命軍部隊の作戦と共に、国の重要地帯に落下する空挺隊を出動させる準備も推し進められた。

わが軍の部隊の激しい攻撃と人民の積極的な反日抗争によって決定的な打撃を受けた日本帝国主義は、祖国解放作戦が開始されて1週間もならない1945年8月15日、無条件降伏を宣言した。

「祖国解放万歳！」

金日成主席の命令を受けた朝鮮人民革命軍の各部隊は総攻撃に移り、対日作戦に加わったソ連軍との協同をもって日本帝国主義侵略軍を撃滅・掃討しつつ祖国への怒涛の進

撃を続けた。

一方、長い間反日蜂起を準備してきた国内各地の地下革命組織は、労働者、農民、青年・学生、そして「徴兵」「徴用」を忌避して潜んでいた愛国青年を決起させ、朝鮮人民革命軍の祖国解放作戦と時を同じくして、至るところで武装隊伍をつくって敗残兵を襲撃・掃討し、日本帝国主義の植民地支配機構を粉砕し、敵とその手先を処刑する果敢な闘争を展開した。

各戦線と国内からの報告資料を総合・分析し、情勢の推移を注視していた主席は、空挺隊に出撃の命令を下した。

8月15日、彼らが飛行場に到着して隊伍を整列し、離陸の命令を待っている時、日本が降伏したという驚くべきニュースが伝えられた。

その瞬間、隊伍は嵐のような歓呼でどよめいた。

「金日成将軍万歳！」

「祖国解放万歳！」

隊員たちは声高らかに万歳を叫び、互いに抱き合って熱い涙を流した。

どんなに待ち望んでいた日なのか！　この日のためにどれほど多くの朝鮮の息子・娘が貴重な血を流したのか！

その日の夜、極東臨時基地の北キャンプでは、日本帝国主義の無条件降伏による朝鮮の解放を慶祝する会合があった。

会合で主席は、意義深い演説を行った。

「祖国解放は、強盗日本帝国主義に抗して血を流して戦ってきた朝鮮の真の革命家の不屈の闘争と国内外の広範な反日愛国勢力の民族挙げての抗戦によって成し遂げられた貴い結実であり、15星霜にわたる抗日武装闘争の偉大な勝利です」

主席は続けて、富強・繁栄する人民の新しい朝鮮を建設するために、朝鮮革命の最後の勝利のためにこぞって力強く闘っていこうと呼びかけた。

全ての参加者は、卓抜した軍事戦略・戦術と非凡な用兵術で日本帝国主義を打ち破り、ついに祖国解放をもたらした金日成主席に、全朝鮮民族の心を合わせて限りない祝賀の挨拶をささげた。

日本帝国主義の無条件降伏によって朝鮮人民は、英雄的な抗日武装闘争で偉大な勝利を収め、祖国解放の歴史的偉業は立派に達成された。

むすび

歴史的な祖国凱旋の途についた金日成主席の顔色は明るくなかった。

数十年間、満州の広野で厳しい吹雪をついて抗日の火の海をくぐりぬけ、朝鮮人民の最大の宿願であった祖国解放の歴史的偉業を達成した主席があれほど心を痛めていたのはなぜだろうか。

それは、長い抗日戦の日々、生死を共にしてきた同志たち、懐かしい故郷へ帰る日を思い描きながらその日を早めるために血を流した同志たちを異国の地に葬って帰国する心痛からであった。

この日、戦死した同志たちを埋葬した場所を具体的に確かめた主席は、その位置をよく覚えておくのだ、彼らを祖国の地に移して安置しよう、と言い、彼らを偲びながら食事もまともに取れなかった。

隊伍が祖国に向かって出発する時にも、遠くの過去の戦場の方を眺め、すぐ出発命令を下せなかった。

1945年の初冬、初雪の降るある日、遠い現地指導の道から帰った主席は、解放された祖国に降る雪を見ると、犠牲

になった同志たちのことが思い出されてならない、この日も彼らは冷たい雪に当たりながら異国の地に葬られている、今日のために血を流した彼らをみな解放された祖国の地に安置すべきだ、と切々と言った。

主席は解放直後、あれほど困難で複雑な環境の下でも、父母の墓を移す前に、異国の土の下に眠る革命同志たちの遺骨を祖国に移し、平壌の牡丹峰と恵山など景色のよいところに彼らを安置するようにした。

1975年10月には、平壌市が一目に見渡される大城山の朱雀峰に革命烈士陵が建立され、それから10年後に改造・拡張された。

「抗日革命烈士の崇高な革命精神は、わが党と人民の心に永遠に生き続けるであろう。

金日成　1985.10.10」

主席の親筆碑と共に、抗日の血戦万里の道を踏み分けながら祖国解放のための聖戦に参加した闘士たちの貴い生は永生の丘で輝いている。

抗日戦の日々に

編　集：安秀英

翻　訳：金進赫

発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：2025年9月

ㄱ-2508800359693

E-mail: flph@star-co.net.kp

http://www.korean-books.com.kp



ISBN 978-9946-0-2471-4